

八尾市文化財調査報告 62

平成21年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

高安古墳群 調査報告書

出土遺物整理調査

服部川支群西側地区測量調査他

2010年3月

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市の東側にある高安山の麓、「やまんねき」は、豊かな歴史遺産が残された地域です。なかでも、「高安千塚」といわれる高安古墳群集中地域には、6世紀代に造られた200基以上の横穴式石室墳が残されており、わが国の古代国家の形成のありかたを考える上でも、大変貴重な遺跡です。

本市ではこの貴重な古墳群を、やまんねきの里山・自然とともに、次世代に残していくために、国史跡指定を視野にいたした保存・調査事業を、文化庁国庫補助事業にて、平成16年度から開始し、平成20年度までに詳細分布調査や、古墳群内の重要古墳の調査、服部川支群の測量調査、出土遺物の整理調査を行ってまいりました。

本年度は、服部川支群西側地区の測量調査、高安古墳群とこれに関する貴重な遺物の整理調査等を行いました。本書はこれらの成果をとりまとめたものです。

これらの成果をもとに、今後は、貴重な歴史遺産である「高安千塚」の保存・活用に向けた事業を進めてまいります。

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

八尾市教育委員会

教育長 中原敏博

例 言

1. 本書は、八尾市教育委員会が、国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）で行った高安古墳群の服部川支群西側地区の測量調査及び出土遺物整理調査等の報告である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長 岸本 邦雄）が主体となって行った。
3. 大阪府教育委員会調査遺物の調査にあたっては、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、東大阪市立郷土博物館のご協力をいただいた。さらに大阪府教育委員会調査遺物については、藤井直正氏、原田修氏に当時の調査についての貴重なご教示をいただいた。また遺物の所見について、(財)八尾市文化財調査研究会の原田昌則氏にご教示をいただいた。八尾市立歴史民俗資料館、大阪府立八尾高校には、保管遺物の実測調査について、多大なご協力をいただいた。大阪府立八尾高校保管遺物の調査にあたっては、棚橋利光氏に多大なご助力をいただいた。ここに、記して厚く御礼申し上げます。

服部川支群西側地区の測量調査にあたっては、土地所有者の方々をはじめ、服部川地区の方々に多大なご協力をいただいた。また、測量図の使用にあたって大阪府八尾土木事務所のご協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます
4. 調査及び調査計画については、「高安古墳群と山麓の古墳保存調査計画検討会議」の白石太一郎氏、増渕徹氏、一瀬和夫氏、高橋照彦氏、花田勝広氏、安村俊史氏、若松博恵氏、森屋直樹氏、岡田賢氏のご指導をいただいた。
5. 服部川支群西側地区の現地測量・図面作成は、株式会社相互技研に委託した。
6. 整理調査は、調査補助員として、実測・製図作業は志田真吾（龍谷大学）・山中良平（大阪大学）・山内千恵子・徳谷尚子が行った。
7. 考察1の執筆及び16・19頁観察表作成は調査担当者との協議のもと、志田真吾（龍谷大学）が行った。
8. 調査担当及び本書の編集・執筆は、考察1を除いて文化財課技師吉田野乃が行った。

本文目次

I. 高安古墳群他出土遺物の整理報告	1
1. 大阪府教育委員会調査遺物	1
2. 八尾市立歴史民俗資料館・大阪府立八尾高校所蔵遺物	10
3. 郡川西塚古墳 表面採集遺物	13
4. 大窪・山畑18号墳出土遺物再整理調査	17
II. 高安古墳群服部川支群西側地区測量調査報告	20
III. 高安古墳群・周辺立会調査報告	
1. 大阪府農免農道 服部川区間立会	27
2. 服部川地区ガス管布設替えに伴う立会 服部川西1号墳	29
IV. 考察	
1. 大窪・山畑18号墳出土のミニチュア炊飯具の甕について	35
2. 「高安千塚」の造営背景について－前段階の山麓の埴輪を有する古墳の検討から－	39

I.高安古墳群他出土遺物の整理調査報告

1. 大阪府教育委員会調査遺物

〔経緯〕

今回、報告する遺物は、昭和41年に行われた大阪府教育委員会による「八尾市高安郡川群集墳分布・実測調査」において出土した高安古墳群の遺物とともに保管されていたものである。

高安古墳群出土遺物については、昨年度、報告を行った。今回報告する遺物は、大阪府教育委員会の調査の折に、表面採集された遺物や確認された遺物とみられ、高安古墳群周辺の山麓の遺跡を考えると、貴重なものであることから、ここに報告するものである。

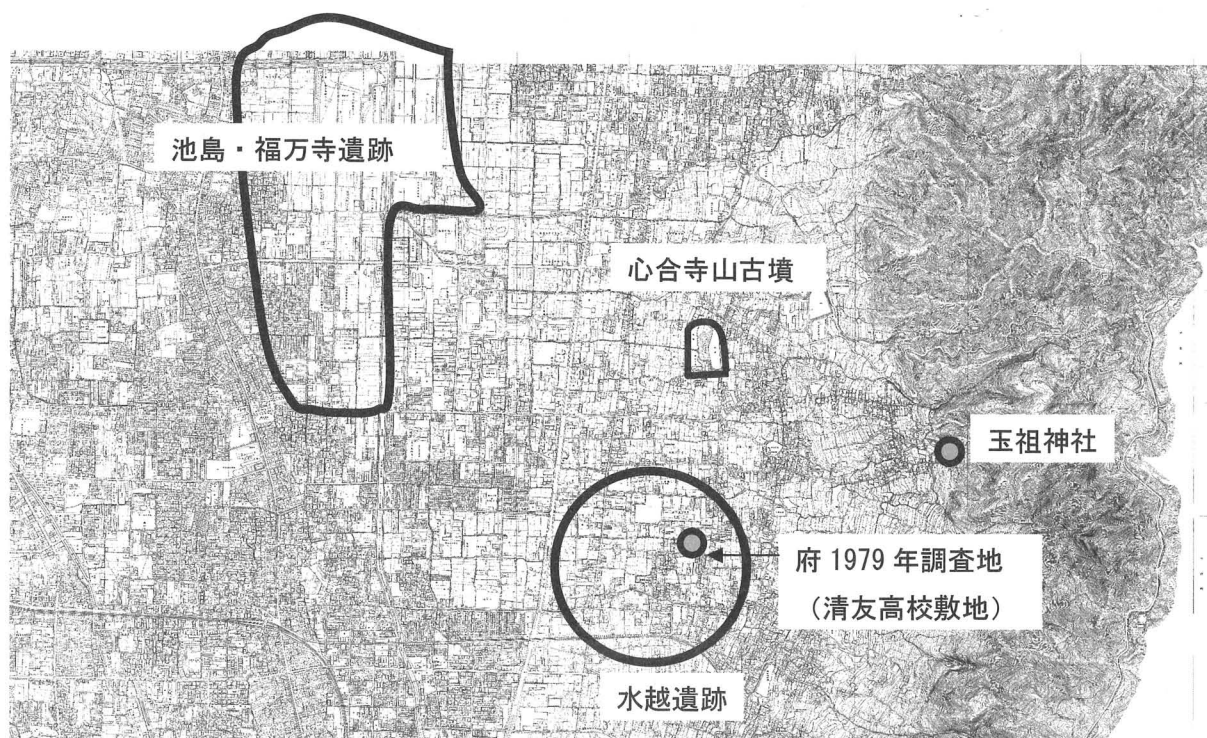
報告する遺物は、高安地区で表面採集された玉未製品及び玉製作工程の剥片と弥生時代の石器、心合寺山古墳（心合寺跡）で採集された瓦と心合寺山古墳出土の蔵骨器の須恵器壺である。

〔高安地区表面採集 玉製品等・石器〕

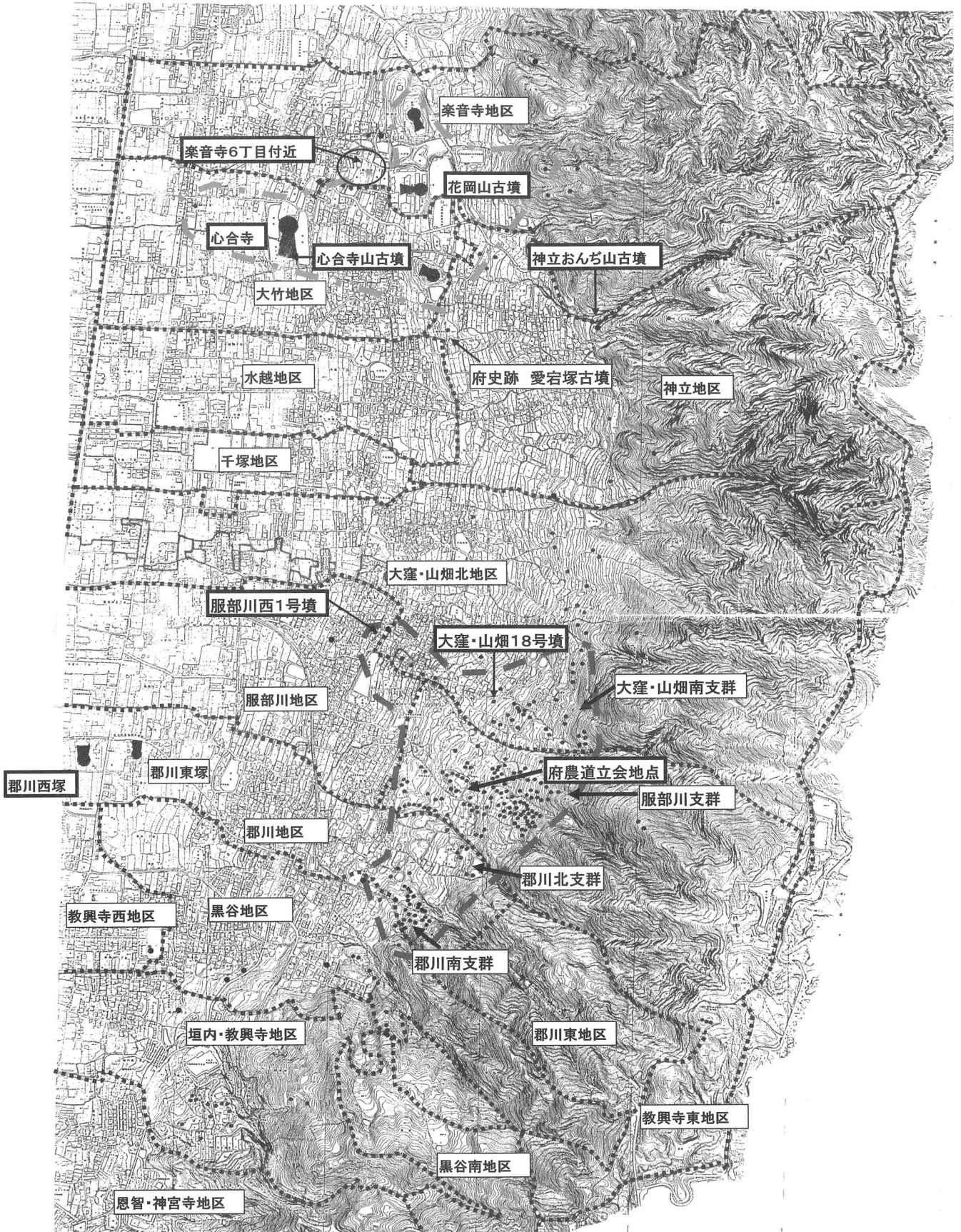
第3・4図は、玉未製品等と石器である。「高安 昭和41年」の注記があることから、現在の八尾市の遺跡名で水越遺跡付近より表面採集された遺物とみられる。

第3図は玉の未製品及び玉製作工程剥片である。9は緑泥片岩かとみられる淡暗緑色の管玉の未製品である。片方の端面は欠損し、孔も深さ2ミリで止まり、貫通していない。12～15は緑泥片岩かとみられる玉製品の工程品もしくは切削剥片かとみられるものである。淡緑白色を呈し、研磨の際の擦痕がみられる。16は他と異なる淡灰色の平滑な石材であり、切断痕の可能性のある痕跡があるが、判然としない。

このような玉未製品や製作工程の剥片は、これまでに水越遺跡を中心とする高安地区で、清原得巖氏採集資料（原田他1976）や、水越遺跡内で1976年に行われた大阪府教育委員会による府立清友高校敷地内の発掘調査（吉岡1988）で報告されている。清原得巖氏採集資料では、碧玉質の未製品や滑石製の模造品・白玉の未製品、砥石や瑪瑙・石英等の原石が報告されている。



第1図 府採集遺物 位置図



..... 分布調査地区割り線



楽音寺・大竹古墳群

高安古墳群 集中地域 (高安千塚)

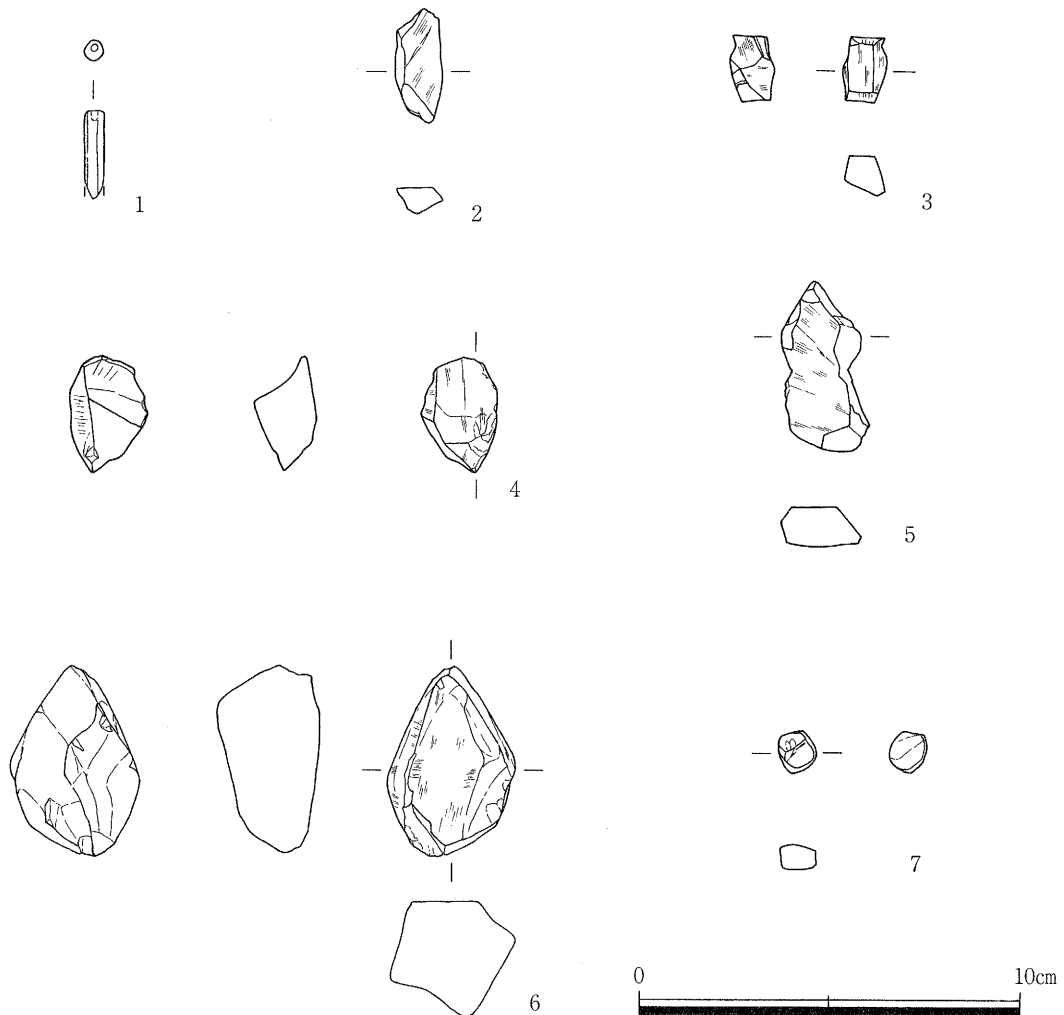
第2図 調査古墳等位置図

一方、府立清友高校敷地内の発掘調査においては、滑石製の管玉未製品、緑色岩の石製模造品や原石等が報告されており、少なくとも5世紀後半頃には、この付近で玉生産が行われていたものと推定され、本遺跡の東方山麓に所在する玉祖神社との関連に注意されている（吉岡1988）。

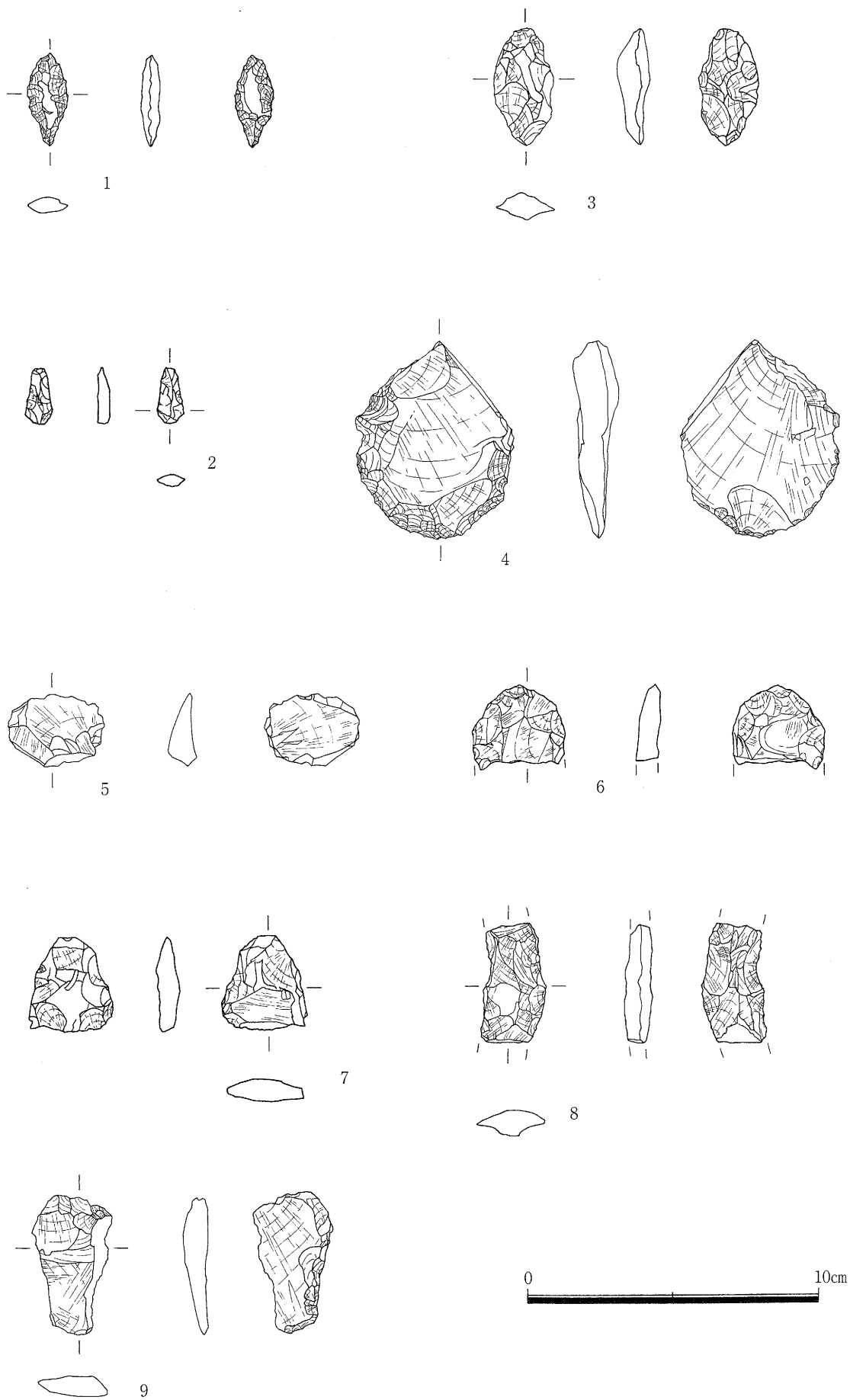
これらの資料については、関川尚功氏も畿内の玉生産のなかで、滑石製玉類の生産を中心にいき、碧玉、緑色凝灰岩製管玉も合わせて製作した玉生産遺跡として位置づけられ、5世紀後半から6世紀前半の時期と推定されている（関川1985）。また、池島・福万寺遺跡においては、近年の大阪府教育委員会による発掘調査で、滑石製模造品129点、滑石製玉類が白玉を中心に3264点も出土しており、5世紀後半から6世紀前半の集落における祭祀に伴うものと考えられている（廣瀬2002）。

今回、報告した玉未製品、玉製作工程の剥片とみられる遺物も、水越遺跡における玉生産関係の遺物とみられる。今後、その実態や西北方2キロに位置する池島・福万寺遺跡との関係が注意されるとともに、「高安千塚」が造営の前段階時期、5世紀後半から6世紀前半頃の山麓北部の集団の様相を示すものとして注意される。

第4図はサヌカイト製の石器の未製品である。1は石鏃、2.3は石鏃未製品かとみられる。4.5は削器の未製品かとみられるが、4は製品であった可能性もある。6.7は不明だが、石鏃の未製品の可能性がある。8.9は用途不明の未製品である。いずれも弥生時代のものとみられる。



第3図 高安地区採集 玉未製品・剥片実測図 (1 / 2)



第4图 高安地区表面采集石器实测图 (1 / 2)

(引用文献)

吉岡哲 1988「河内の玉作り遺跡－本校敷地周辺の遺跡とその性格－」『紀要 清友』第1号 大阪府立清友高等学校
原田修 久貝健 島田和子「高安の遺跡と遺物」1976『大阪文化誌 特輯 清原得巖所蔵考古資料図録』通巻第6号
関川尚功 1985「古墳時代における畿内の玉生産」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾
廣瀬時習 2002「池島・福万寺遺跡の「滑石製品」－出土滑石製品とその「生産」について－」『池島・福万寺遺跡2』分析・
考察編

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	材質
1	管玉	残存長2.35 残存幅0.55 残存厚0.2	面取り痕あり。	淡暗緑色	緑泥片岩
2	未成品	残存長3.05 残存幅1.3 残存厚0.7	研磨痕あり。	淡緑白色	緑泥片岩
3	未成品	残存長1.75 残存幅1.15 残存厚1.05	研磨痕あり。	淡緑白色	緑泥片岩
4	未成品	残存長3.05 残存幅2.0 残存厚1.6	研磨痕あり。	淡緑白色	緑泥片岩
5	未成品	残存長4.4 残存幅2.1 残存厚1.05	研磨痕あり。	淡緑白色	緑泥片岩
6	未成品	残存長5.0 残存幅3.35 残存厚3.1	研磨痕あり。	淡緑白色	緑泥片岩
7	玉未成品か	残存長1.1 残存幅0.9 残存厚0.7	切断痕ありか。	淡灰色	不明

高安地区採集 玉未製品観察表 (第3図)

番号	器種	法量 (cm)	材質	備考
1	石鏃	残存長3.2 残存幅1.4 残存厚0.5	サヌカイト	
2	石鏃未成品	残存長1.95 残存幅0.95 残存厚0.4	サヌカイト	
3	石鏃未成品	残存長4.1 残存幅2.1 残存厚1.1	サヌカイト	
4	削器	残存長6.9 残存幅5.3 残存厚1.5	サヌカイト	未成品か
5	削器か	残存長2.5 残存幅3.2 残存厚0.95	サヌカイト	
6	不明	残存長2.6 残存幅3.2 残存厚0.8	サヌカイト	石鏃未成品か。中央付近で欠損
7	不明	残存長3.25 残存幅2.9 残存厚0.8	サヌカイト	石鏃未成品か
8	不明	残存長4.2 残存幅2.1 残存厚1.0	サヌカイト	
9	不明	残存長4.8 残存幅2.6 残存厚0.8	サヌカイト	

高安地区採集 石器観察表 (第4図)

〔心合寺表面採集瓦〕

第6図の1から11は、昭和41年度の大阪府教育委員会調査の高安古墳群出土遺物とともに保管されていた心合寺跡表面採集と注記されていた瓦である。注記には、昭和49年と昭和51年の採集年時が示されている。心合寺山古墳西側に推定されている心合寺跡からは、これまで飛鳥時代後期から室町時代にかけての瓦の出土が、清原得巖氏の採集資料（原田修他1976）や史跡心合寺山古墳の整備に伴う発掘調査等（八尾市教育委員会2001他）から確認されており、心合寺山古墳の墳丘本体西側くびれ部から外堤付近、さらにその西側付近に飛鳥時代後期から室町時代頃の寺院跡のあったことは、確実にみられる。

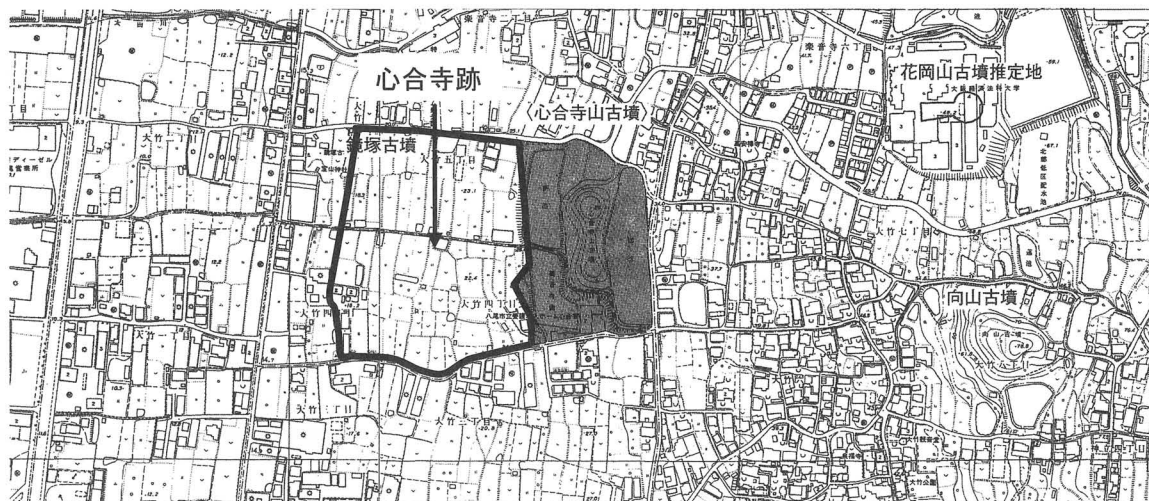
1から4は軒丸瓦である。1は瓦当面の内区が摩滅しているが、蓮華文であった可能性のある軒丸瓦であり、外区内縁には珠文を配する。2は左巻きの巴文の軒丸瓦であり、外区の幅は狭く、外区内縁には大粒の珠文を配する。3は瓦当部の内区の文様は不明であるが、外区内縁に大粒の珠文を配する。瓦当部は全体に厚みが薄い作りである。巴文の軒丸瓦であった可能性がある。4も左巻きの巴文の軒丸瓦であるが、これは外区の幅は広く、外区内縁には大粒の珠文を配する。5は二つの左巻きの巴文を一組とした文様を配する軒平瓦である。2から5は清原得巖氏の採集資料に同文の類例がある。2.3は鎌倉時代頃、4.5は室町時代頃の時期と考えられる。6は平瓦の凸面に仏像の顔面かとみられる線刻を施した特異な瓦である。暗褐色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土はやや粗である。調整は摩滅のため判然としないが、内外面とも不定方向のナデかとみられる。線刻は眼・眉・鼻の表現がなされ、眉間には、白毫を表したとみられる直径5ミリの丸とそこから上方に放射状に延びる長さ1.5cmの線刻がみられ、線刻の周囲と中に赤色顔料を塗布したとみられる痕跡が確認された。時期は判然とはしないが、比較的厚みをもつ平瓦であることから、奈良時代から平安時代のものではないかとみられる。これとは異なるが、心合寺山古墳基礎発掘調査（八尾市教育委員会1996）において、西側くびれ部から范型による人の形を二体を配した磚状瓦製品が出土している。

7から9は丸瓦で、7は行基葺式であり、凸面は縄目タタキのちに丁寧なナデ消しが行われている。8は玉縁式で凸面は長軸方向のケズリが施されている。9も玉縁式の丸瓦で凹面の一部にナデがみられるが、他は摩滅により不明である。11は平瓦で凸面に斜格子タタキがみられる。いずれも飛鳥時代後期から奈良時代にかけての時期、7世紀後半から8世紀前半頃の時期のものとみられる。

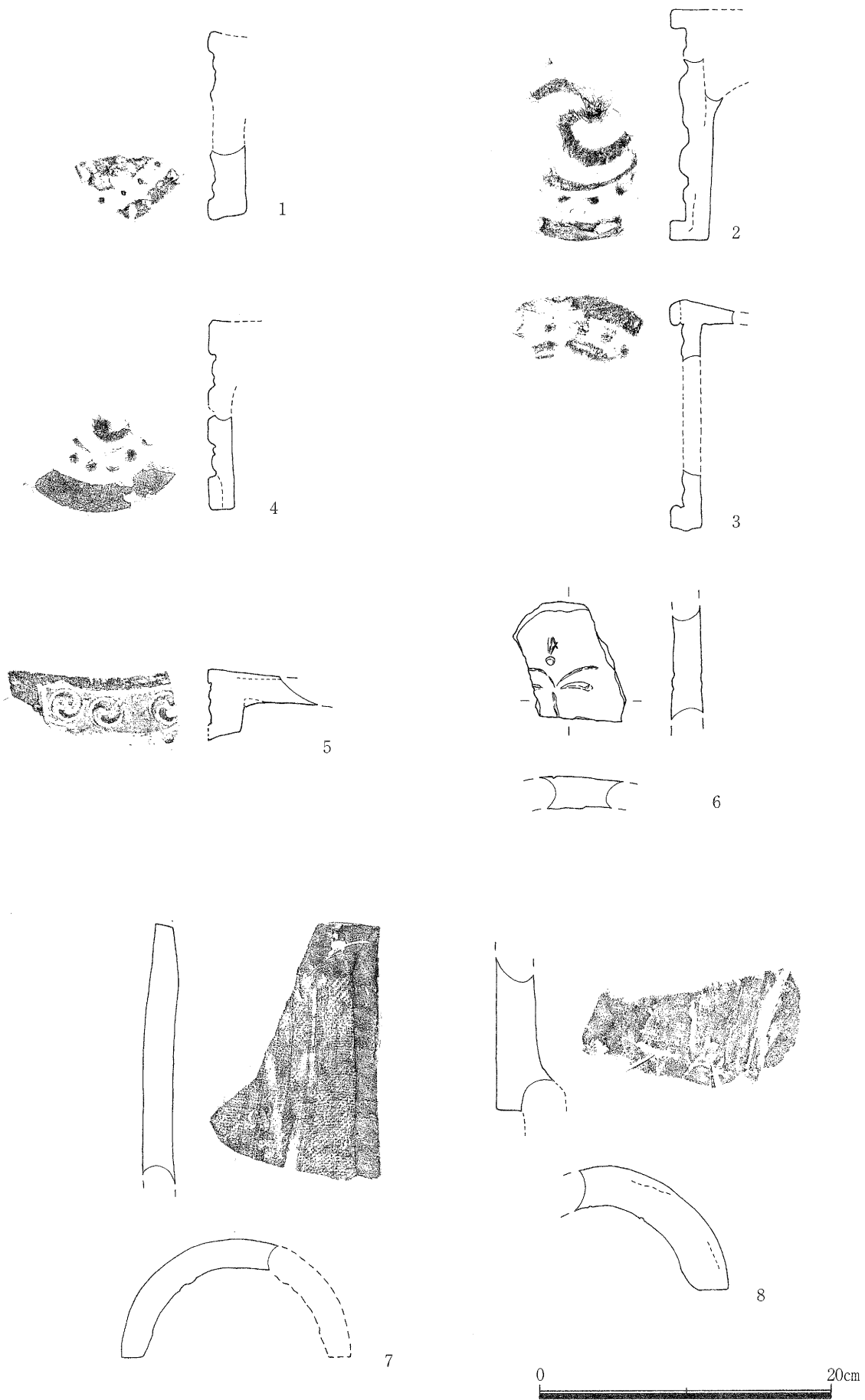
〔心合寺山古墳出土 蔵骨器〕

本資料については、既に原田修氏によって『大阪文化誌』に紹介されている（原田修他1976）。原田氏の報告によると、昭和40年頃に心合寺山古墳の前方部斜面東側の一面から採集されたものであり、採集付近に人骨細片がみられたことと、器形から蔵骨器として使用されたものとされている。

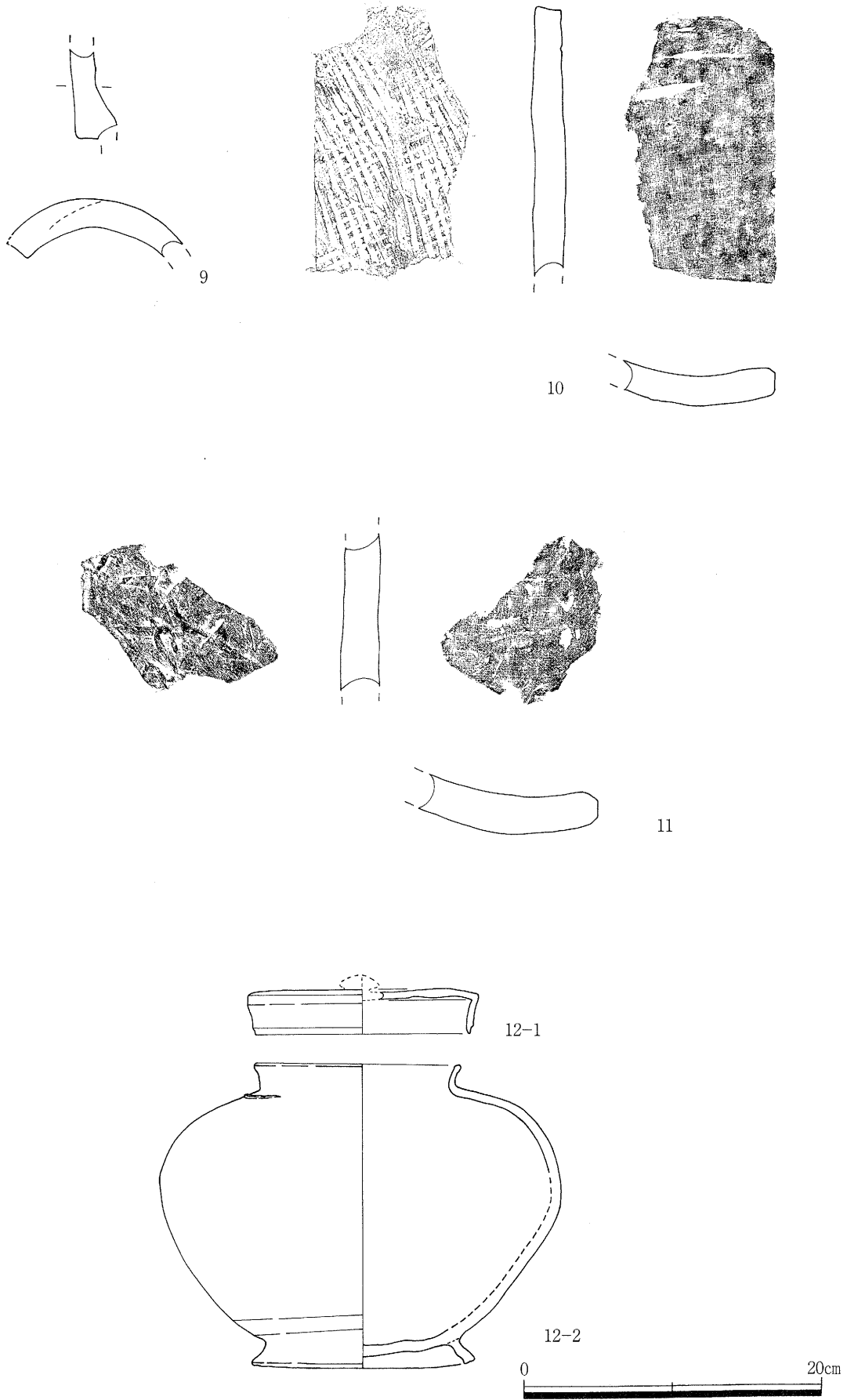
須恵器の壺と蓋である。壺は肩の張る体部に外反する口縁を有し、高台は高く外下方に張り出す。壺蓋はつまみを欠失するが、天井部は平らで口縁はやや内傾し、口端部が突出する。口縁端部は欠損して



第5図 心合寺山古墳と周辺位置図



第6図 心合寺表面採集瓦実測図 (1 / 4)



第7図 心合寺表面採集瓦・蔵骨器実測図（1 / 4）

いる部分が多いが、この欠損している部分は壺の肩部に融着しており、原田氏が指摘されているように、壺に蓋を被せてセットとした状態で焼成されている。本例はその器形から、平城宮編年の平城Ⅱ期、奈良時代前半の8世紀前半頃のものと考えられる。

蔵骨器であったとみられることから、心合寺山古墳西側に所在した心合寺との関係が注意されるが、心合寺山古墳は墳丘本体の西側を中心に心合寺関連の瓦等の遺物が出土していることから、墳丘本体そのものも心合寺関連の施設であった可能性も考えられる。江戸時代の文献である『大東家文書』の明和四年（1767年）の記述には、「心合寺千住観音堂山」の記載がある（八尾市教育委員会1996）。これと直接関連するかは不明であるが、心合寺山古墳の後世の様相を考えるうえで貴重な資料であり、今後、心合寺の瓦等の資料とともに検討していきたい。

（引用文献）

原田修 久貝健 島田和子「高安の遺跡と遺物」1976『大阪文化誌 特輯 清原得巖所蔵考古資料図録』通巻第6号

八尾市教育委員会 2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』八尾市教育委員会

八尾市教育委員会 1996『史跡心合寺山古墳基礎発掘調査報告書』八尾市教育委員会

番号	種類	器種	部位	法量 (cm)	調整	色調	焼成	胎土		備考
1	軒丸瓦		瓦当部	復元径14.0 残存4.8	内外面-摩滅のため調整不明	茶褐色	やや軟質	普通	直径1mm以下の砂粒を僅かに含む。	
2	軒丸瓦		瓦当部	復元径16.0 残存長4.5 残存高12.5	瓦当部裏面-エビオサエ・不定方向ナデ 瓦当部下面-横方向ナデ	黒灰色	軟質	粗	直径5mm以下の砂粒を僅かに含む。	
3	軒丸瓦		瓦当部	復元径18.0 長4.5 残存高4.3	上面-不定方向ナデ	暗茶褐色	やや軟質	粗	直径5mm以下の砂粒を含む。	
4	軒丸瓦		瓦当部	復元径13.2 残存長1.8 残存高6.6	瓦当部裏面-外縁に平行するナデ・不定方向ナデ 瓦当部下面-外縁に平行するナデ	黒灰色	硬質	やや良	直径3mm以下の砂粒を僅かに含む。	
5	軒平瓦		瓦当部	残存幅11.8 最大長7.6	上面-短軸方向ナデ 瓦当部下面-短軸方向ケズリのち同方向ナデ 瓦当部裏面-短軸方向ナデ 平瓦部凸部-長軸方向ナデ	黄褐色	やや軟質	普通	直径7mm以下の砂粒を僅かに含む。	
6	平瓦			残存長8.0 残存幅6.0	内外面-不定方向ナデ	暗茶褐色	やや軟質	粗	直径4mm以下の砂粒を僅かに含む。	線刻があり、周辺に赤色顔料が付着。
7	丸瓦		丸瓦部	残存長17.8 残存幅10.9 高さ8.2	凸面外面-縄目タタキのち斜め~短軸方向のナデ 側面-短軸方向のケズリのちナデ。凹面-布目痕残存。側面から続くケズリ。	淡灰色	硬質	やや良	直径5mm以下の砂粒をやや含む。	行基葺式
8	丸瓦		丸瓦部	残存長10.5 残存幅10.6 高さ8.7	凸面~側面外面-長軸方向のケズリ・内面-一部長軸方向ナデ。布目痕残存。	黒灰色	やや硬質	やや粗	直径10mm以下の砂粒をやや含む。	玉縁につづく部分
9	丸瓦		丸瓦部	残存長6.0 残存幅11.7 高さ3.2	凸面-一部短軸方向のナデ・他は摩滅のため不明。	灰白色	非常に軟質	非常に粗	直径7mm以下の砂粒を多く含む。	玉縁につづく部分
10	平瓦		平瓦部	残存長18.5 存幅11.9 高さ4.7	凹面外面-布目痕残存。端部付近に長軸方向のケズリ 側縁-長軸方向のケズリ。端部-短軸方向のケズリのちナデ。凸面-斜格子タタキ。	黒灰色	硬質	粗	直径1cm以下の砂粒を多量に含む。	
11	平瓦		平瓦部	残存長10.5 残存幅11.9 高さ4.7	凹面-布目痕残存。側面から続くケズリ。凸面外面-斜格子タタキ 側面-長軸方向のケズリ。	灰色	硬質	やや良	直径4mm以下の砂粒をやや含む。	
12-1	須恵器	壺蓋		口径 14.5残 存高 3.1	天井部外面-ロクロヘラケズリのちナデ 側面~内面-ロクロナデ	外面-暗灰色 内面-灰色	硬質	良	直径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む。	蔵骨器として使用。外面全体に自然釉付着。口縁部端部の多くが欠損し、壺部に付着する。壺と蓋をセットにした状態で焼成したとみられる。
12-2	須恵器	壺		口径 138 底径14.5 器高 20.5~20.7	頸部~体部外面-丁寧なロクロヘラケズリ 口縁部外面~体部内面-ロクロナデ 高台部内外面-ロクロナデ 底部外面-丁寧なロクロヘラケズリ	灰色	硬質	良	直径2mm以下の砂粒をごくわずかに含む。	蔵骨器として使用。肩部から腹部外面と脚台部外面に自然釉付着。高台部は焼け歪みあり。

心合寺山古墳（心合寺）採集瓦・須恵器観察表

2. 八尾市立歴史民俗資料館・大阪府立八尾高校所蔵遺物

高安古墳群では発掘調査例が少ないため、出土遺物からの検討ができにくい状況にある。このため、採集資料として保管されている数少ない遺物についても資料化を図る必要があり、ここでは、八尾市立歴史民俗資料館の寄贈資料及び大阪府立八尾高校保管遺物について報告したい。なお、八尾高校保管遺物については、高安古墳群出土品ではないが、山麓の古墳を考えるうえで貴重な資料と考えられることからここに報告する。

〔八尾市立歴史民俗資料館所蔵遺物〕

1は個人による寄贈品で、神立出土おんち山古墳から70年から80年前に出土したとの注記のあった須恵器の提瓶である。製作技法の観察から三つに分割して製作されたことがわかる。体部の裏面側には、ロクロナデの痕跡が明瞭に遺存することから、まず、体部の裏面側の部位から体部表面側の周囲部位を横位に置いて、ロクロで成形し、後から体部表面側の中央付近の円盤状部位を貼り付けている。表面側には、円盤貼り付けの際の放射状のキザミメが遺存している。円盤を貼り付けた後に、表面側には、ロクロによる同心円文状のカキメ調整がなされるが、裏面側は、ロクロヘラケズリのままである。このちに別に成形された口縁部から頸部の部位を貼り付けたものとみられ、頸部内面には貼り付けの際の接合痕が残る。

この提瓶は把手部分は退化した粘土塊状を呈し、体部も扁平であることから、田辺昭三氏の須恵器編年のTK43型式期頃、6世紀第3半期頃の時期のものとみられる。

神立おんち山古墳（神立4号墳）は、八尾市大字神立973番3に所在した横穴式石室墳で、1968年（昭和43年）に浄水貯水池設置に伴う緊急調査が、八尾市教育委員会によって行われている（八尾市教育委員会1968）。調査によって奥壁と東側の側壁の一部が確認されたようであり、玄室幅2m前後の石室と考えられている。また、刳貫式家形石棺の棺身が確認されている。出土遺物として、須恵器坏B、甗、長頸壺、土師器、小鉄片等が確認されており、7世紀初め頃から8世紀初め頃の時期のものである。このことから、おんち山古墳の築造は7世紀初め頃で、8世紀初め頃まで追葬が行われていたものと考えられる。今回紹介した提瓶はこれらの出土遺物の時期よりも古く、齟齬がみられる。本資料の出土の経緯がわからないことから判然としないが、神立おんち山古墳周辺にあった別の横穴式石室からの出土品である可能性も考えられる。

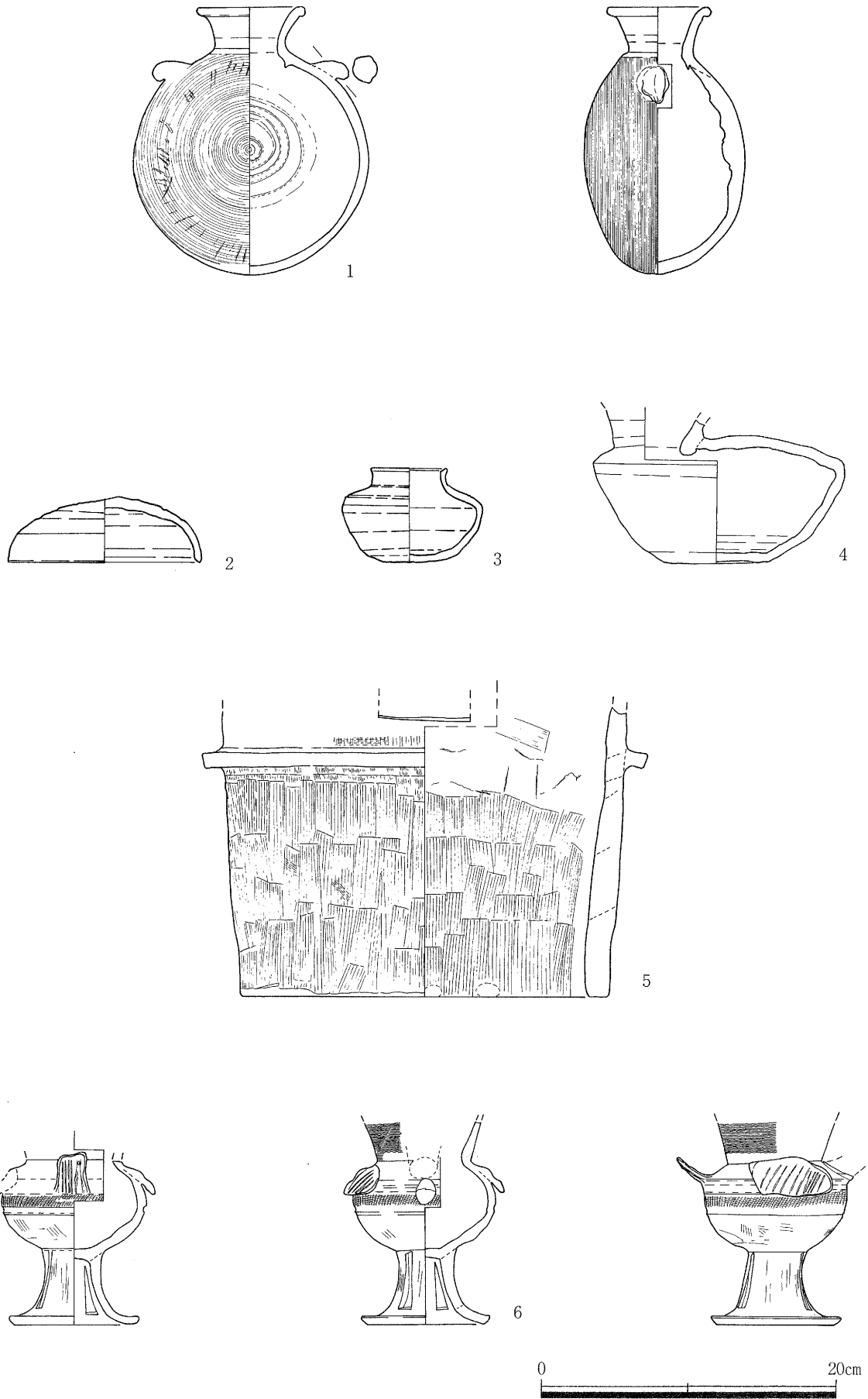
2は個人の寄贈品で、高安出土とされている須恵器の坏蓋である。TK43型式期頃、6世紀第3半期頃の時期のものとみられる。

2～4も個人による寄贈品であり、注記には出土地は楽音寺六丁目で、昭和34年～35年の出土とある。3は須恵器の短頸壺であり、TK46型式期頃、7世紀後半頃のものとみられる。4は須恵器の平瓶である。TK48型式からMT21型式期頃、7世紀末から8世紀初め頃のものとみられる。

〔大阪府立八尾高校所蔵遺物〕

5は「昭和8年 花岡山古墳」の注記がある円筒埴輪である。底径25cm、残存高19.8cmで、第一段タガまでの高さは17cmを計る。第二段目に方形スカシがみられる。色調は淡橙色を呈し、焼成は黒斑がみられ、野焼き焼成で、やや硬質である。胎土は精良である。外面調整は第一段目は5本/cmのタテハケが施され、第二段目はタテハケと僅かにヨコハケがみられる。内面は、第一段目はタテハケで、第二段目にはナナメハケがみられる。タガは突出度が高く、方形スカシがみられることから、円筒埴輪編年Ⅱ期、4世紀後半の時期のものである。

花岡山古墳は、楽音寺六丁目地内の現在、大阪経済法科大学が所在する尾根上にあった全長73mの西面する前方後円墳である。1960年（昭和35年）頃の採土工事によって消滅した。江戸時代には花岡山福生院という寺院が前方部に建てられていた。花岡山古墳の円筒埴輪については、清原得巖氏による採集試料2点が報告されている（原田他1976）。また八尾市立歴史民俗資料館所蔵の円筒埴輪が島田拓氏によって報告されている（島田2002）。清原得巖氏採集の円筒埴輪も方形スカシをもつもので、1点は底径26cm、第一段タガまでの高さ17cm、もう1点は底径26.5cm、第一段タガまでの高さ17cmを計り、本例と近似した法量である。花岡山古墳の東方に所在する全長160mの前方後円墳である心合寺山古墳



第8図 八尾市立歴史民俗資料館・府立八尾高校所蔵遺物実測図 (1/4)

の円筒埴輪は、川西編年Ⅲ期に位置付けられるものである。円筒埴輪の主体となる小型品は法量にばらつきが多いが、底径は17～22 cmのものが多い。また第一段タガまでの高さは平均で13cm前後である。花岡山古墳の円筒埴輪は心合寺山古墳の円筒埴輪に比べて第一段タガまでの高さが高く、タガの断面形状やスカシのありかたとともに、心合寺山古墳の円筒埴輪よりも古い時期のものであることを示している。心合寺山古墳は中・北河内最大の前方後円墳であり、5世紀前半の中河内の地域首長墓と考えられているが、花岡山古墳は、その前代の地域首長墓であったとみられる。今回の報告した資料は、4世紀後半の地域首長墓であった花岡山古墳を知る数少ない資料として貴重である。

6は東大阪市六万寺出土とされる須恵器の台付鳥形甕である。本資料は既に村川行弘氏によって報告されている（村川1955）。残存高13.5cmを計り、口縁部と鳥形の首部を欠失する。肩部の両側に線刻を施した粘土板を取り付けて羽を表現し、背面には尾が取り付けられる。また、注口部の上には、鳥の首部分の欠損痕が残存する。外面の肩部と内面の頸部と腹部下半に自然釉が付着する。本資料は甕部分の形状から、6世紀前半から中頃の時期の所産と考えられる。非常に丁寧な作りであり、優品と呼べるものである。このような鳥形甕は福岡県番塚古墳に類例があるが（愛知県陶磁資料館1995）、番塚古墳例は台付ではない。本資料は東大阪市六万寺出土とあるのみで詳細は不明であるが、古墳からの出土品である可能性が高く、また、極めて類例の少ない装飾須恵器の一資料として貴重である。

(引用文献)

八尾市教育委員会 1968『神立おんち山古墳調査概報』

原田修 久貝健 島田和子 1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌 特輯 清原得巖所蔵考古資料図録』通巻第6号

島田拓 2002「花岡山古墳の円筒埴輪に関する若干の考察」『文化研究』第8号 近畿大学

村川行弘 末中哲夫 1955『近畿大学周辺史－河内国中河内郡の歴史 原始古代編』近畿大学商経学会

愛知県陶磁資料館 1995『古代の造形美 装飾須恵器展』

番号	調査地点	種類	器種	部位	法量 (cm)	調整	色調	焼成	胎土	備考	
1	(伝) 神立おんち山古墳出土	須恵器	提瓶		器高18.5 口径7.0 体部最大幅16.15 体部最大厚11.0	口縁部～肩部外面～内面 -ロクロナデ。体部表面 -放射状キザミメのちカ キ目体部裏面-ロクロヘ ラケズリ	淡灰色	やや軟	普通	直径3mm以下 の砂粒を 含む。	体部表面には円盤状の粘 土板を貼り付け時のキザ ミメが放射状に残る。
2	高安出土	須恵器	坏蓋		器高44 口径13.0	天井部外面-ロクロヘラ ケズリ。口縁部～内面- ロクロナデ。内面中央部 -仕上げナデ。外面全体 -ロクロヘラケズリ・ロ クロナデのち縦～斜め方 向ナデ。	暗灰色	やや硬	粗	直径4mm以下 の砂粒を 多く含む。	
3		須恵器	短頸壺		器高64 口径5.1	口縁部～体部上半外面- ロクロナデ。内面-ロク ロナデ。体部下半～底部 -ロクロヘラケズリ	淡灰色	硬	やや粗	直径4mm以下 の砂粒を やや多く含 む。	口端部～肩部外面-自然 釉ごく少量付着。
2	楽音寺6丁目 昭和34～35 年出土	須恵器	平瓶		底径7.1 残存高10.5	頸部～体部外面-ロクロ ナデ 肩部と体部屈曲部 外面及び体部下方-ロク ロヘラケズリのち体部は タテ・ナメ方向ナデ。 底部外面-不定方向 ナデ。ヘラ切痕 内面- ロクロナデ	淡灰色	やや硬	やや粗	直径6mm以下 の砂粒を 多く含む。	肩部外面に自然釉付着。 体部下部に焼成の際に付 着したとみられる別個体 片融着。体部外面に黒色 の色葉付着。
5	昭和8年 花 岡山古墳出 土	埴輪	円筒埴輪	底部	底径25.0 第一段タガま での高さ17.0 残存高19.8	底部外面-タテハケ。第 2段外面-タテハケのちヨ コハケ。第2段内面-ナ メハケ。底部内面-タ テハケ。いずれもハケメ 原体は5本/cm	淡橙色	やや硬	良	直径3mm以下 の砂粒を 含む。	二段目に幅6.4cmの方形 スカシをいれる。
6	東大阪市 六万寺出土	須恵器	台付鳥形 甕	頸部～ 底部	残存高13.9 底径8.1 腹部最大径9.8	肩部・脚部外面-ロクロ ナデ。脚部はのち板ナ デ。頸部外面-波状文。 波状文の下にナデ。腹部 外面-三条の沈線の間に ヘラ描き列点文。腹部下 半外面-ロクロヘラケズ リのちヘラケズリ・板ナ デ?・不定ナデ。内面- ロクロナデ。	灰色	硬	非常に良		外面の肩部と内面の頸部 と腹部下半に自然釉付 着。

3. 郡川西塚古墳 表面採集遺物 (第10図・11図)

今回報告する遺物は、郡川西塚古墳で1973年に表面採集された埴輪を主体とする遺物であり、同年に行われた中田遺跡調査会有志による測量調査の際に採集されたものとみられる。八尾市に保管されていた調査当時の測量図には、前方部頂部東側付近に「円筒埴輪列ありか」の注記がある。この資料は永く収蔵庫に保管されており、近年、その存在が明らかになったものである。郡川西塚古墳は、明治35年に開墾に伴って初期横穴式石室とみられる石室が出土し、銅鏡、甲冑、垂飾付耳飾、須恵器をはじめとする副葬品が出土したが、発掘調査は行われておらず、埴輪については、これまでに郡川東塚古墳調査時に8点の表面採集埴輪が報告されているのみである(樋口2006)。郡川東塚・郡川西塚の築造直後に「高安千塚」の造墓が開始することからも、郡川西塚古墳は郡川東塚古墳とともに、「高安千塚」を考えるうえでも重要な古墳であることから、今回ここに報告するものである。

1～15は、円筒埴輪片である。いずれも焼成は窖窯焼成で、ほとんどがやや硬質であり、色調は明乳褐色から褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。1～6、9～15の体部片は、タガは断続ナデによる極めて低平な台形を呈するものがほとんどで、三角形を呈するものもみられる。外面調整はタテハケのみである。径の判明する体部片の1～6の最大径は19～24cmである。6は円形スカシを確認できる。7、8の底部片は、ユビオサエや強い横方向ナデによる底部調整が行われる。外面調整は、縦から斜め方向のユビナデである。底部径は7が16cm、8が17.8cmを計る。16は不明の形象埴輪片である。これらの埴輪片は、断続ナデによる極めて低平なタガの形状、外面調整が底部第1段のみナデであり、他はタテハケであること、さらに底部・体部径の法量や色調・焼成も、郡川東塚の円筒埴輪に近似する。17は形象埴輪の蓋形埴輪の立飾部の基部付近かとみられるものである。外面調整はユビオサエのみで無文である。18は須恵器の坏身である。口端部を欠くが、立ち上がりが比較的高いもので、TK10型式期古段階のものとみられる。表面採集資料であるため、判然としないが、後述する埴輪の時期と矛盾しないものとみられる。

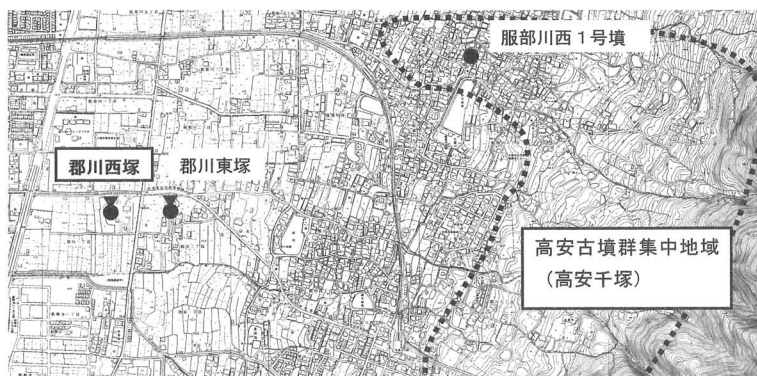
19は、郡川東塚古墳の時期より新しいもので、土師器の坏Aである。内面に放射状暗文が一段みられる。平城宮編年の平城Ⅲ期頃、8世紀第2四半期頃の時期とみられる。

さて、今回報告した郡川西塚古墳の表面採集の円筒埴輪は、郡川東塚古墳の円筒埴輪と近似するものであり、考察2において詳述したように、山麓の円筒埴輪編年Ⅴ期の中でも最新段階に位置づけられ、6世紀第2四半期頃に位置づけられる。郡川西塚古墳からは、石室内からTK47型式期に位置づけられる須恵器が報告されており(中村1991)、従来、郡川西塚古墳は郡川東塚古墳に先行する時期の築造と考えられてきたが、円筒埴輪の様相をみる限りでは、郡川西塚古墳は郡川東塚古墳とほぼ同時期に造られたものと考えられる。今後、両墳の他の副葬品などを含め、さらに検討していく必要がある。

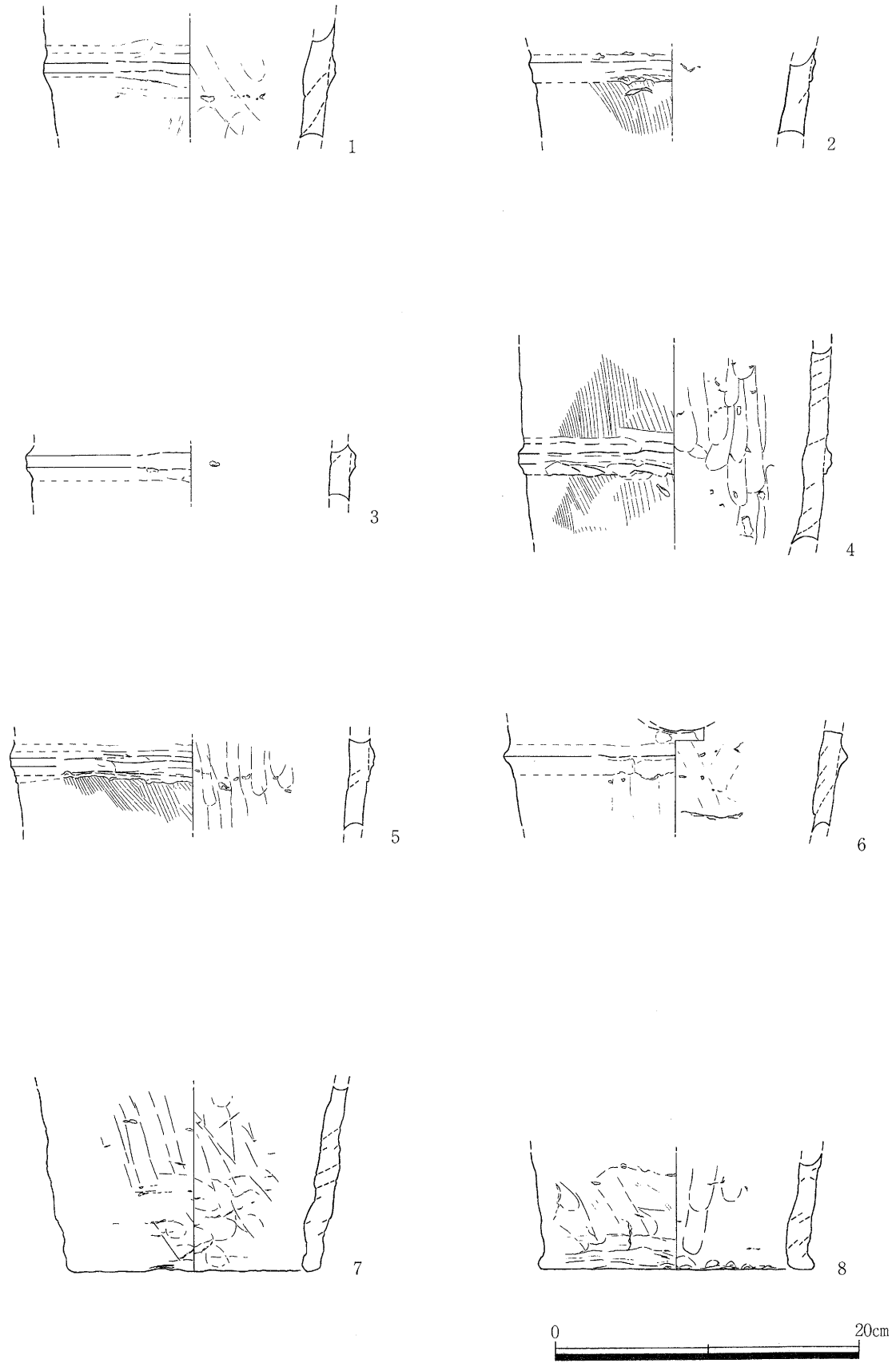
(引用文献)

樋口薫 2006 「埋蔵文化財発掘調査報告 郡川東塚古墳 第1次調査」『八尾市立埋蔵文化財センター報告7』八尾市教育委員会(財)八尾市文化財調査研究会

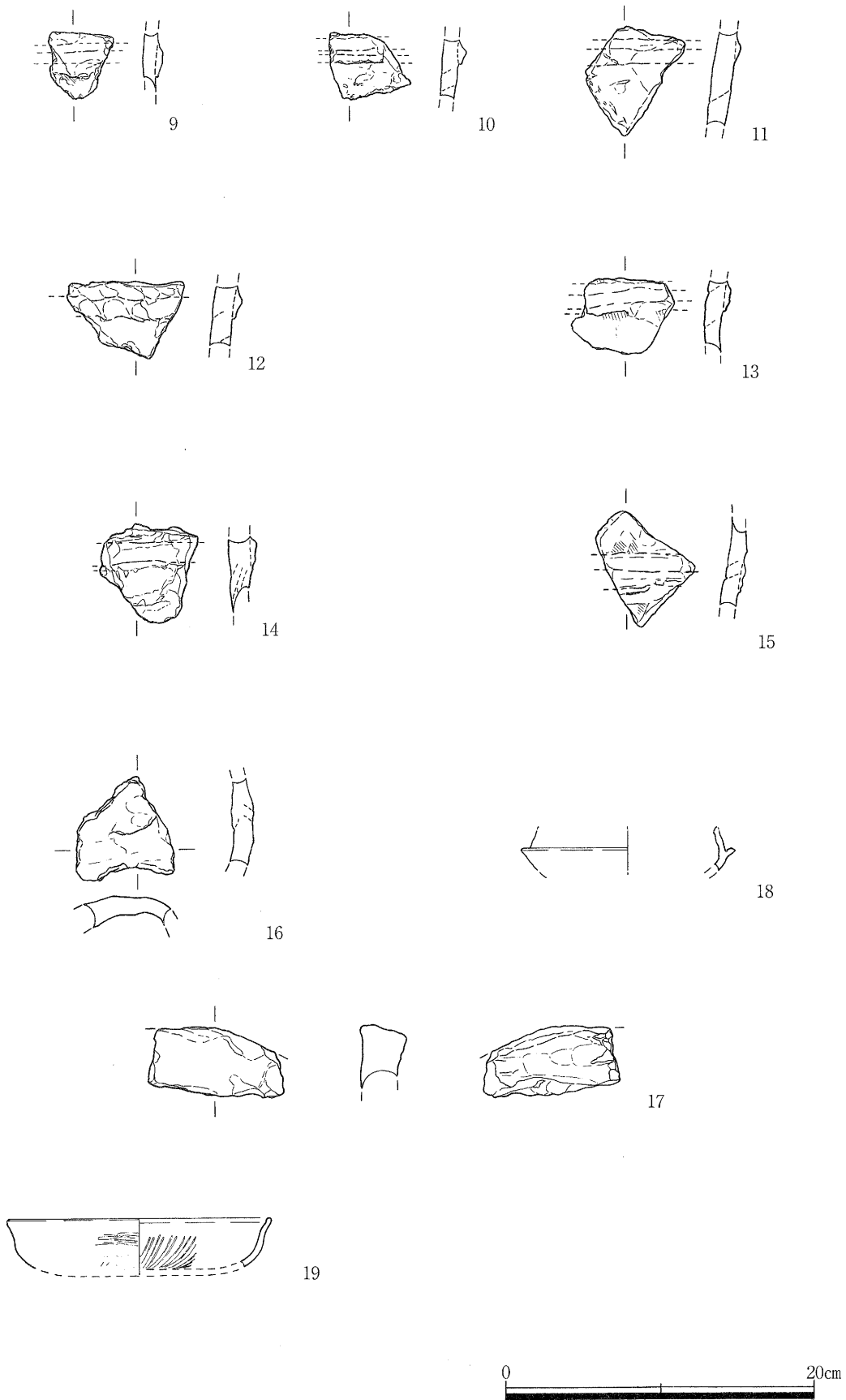
中村浩 1991 「大阪府八尾市郡川西塚古墳出土須恵器について－東京国立博物館保管資料の再検討－」『大谷女子大学紀要』第26号 第1輯



第9図 郡川西塚古墳位置図



第10図 郡川西塚表面採集埴輪実測図1 (1 / 4)



第11図 郡川西塚表面採集埴輪実測図2 (1 / 4)

番号	種類	器種	部位	法量 (cm)	調整	色調	焼成	胎土		備考
1	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	最大径19.3・ 残存高7.9	外面-ナナメハケ・横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-ユビオサエ・ヨコナデ	褐色	やや硬	粗	直径4.5mm以下の砂粒を多く含む。	
2	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	最大径19.1・ 残存高5.85	外面-タテハケ (8本/cm)・横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-タテナデ	明乳褐色	やや硬	やや粗	直径2mm以下の砂粒を含む。	
3	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	最大径21.0・ 残存高3.75	外面-横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-ユビオサエ・ナデ	明乳褐色	やや硬	やや粗	直径3.5mmの砂粒を多く含む。	
4	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	最大径20.7・ 残存高13.05	外面-タテ・ナナメハケ (8本/cm)。横方向タガ貼り付け時の断続ナデ。内面-タテ方向ユビナデ	明乳褐色	やや硬	粗	直径3mm以下の砂粒を多く含む。	
5	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	最大径24.2・ 残存高6.1	外面-ナナメハケ (12本/cm)・横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-タテ方向ユビナデ	明乳褐色	やや硬	粗	直径5mm以下の砂粒を多く含む。	
6	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	最大径22.8・ 残存高6.6	外面-タテナデ・横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-ナナメナデ	明乳褐色	やや硬	粗	直径7.5mm以下の砂粒を多く含む。	円形スカンあり。第1段突帯か
7	埴輪	円筒埴輪	底部	最大径20.7・ 残存高12.2・ 基底部径16.0	外面-タテ・ナナメナデ。内面-ユビオサエ。タテ・ナナメナデ	明乳褐色	やや硬	粗	直径3.5mm以下の砂粒を多く含む。	底端部に圧痕あり
8	埴輪	円筒埴輪	底部	最大径19.3・ 残存高7.7・ 基底部径17.8	外面-ナナメナデ・基底部は強いヨコナデ。内面-タテナデ・基底部はユビオサエ	明乳褐色	やや硬	粗	直径6mm以下の砂粒を多く含む。	粘土紐の織目が明瞭に残り、粗雑な作りである。
9	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高4.3・ 残存幅4.2・ 最大厚1.3	外面-ナナメハケ (10本/cm)・横方向貼り付けナデ。内面-ユビオサエ・ナデ	淡乳褐色	やや硬	粗	直径2mm以下の砂粒を多く含む。	
10	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高4.15・ 残存幅4.7・ 最大厚1.55	外面-粗いナナメ・不定ナデ。横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-ユビオサエ・ナデ	淡乳褐色	普通	粗	直径2.5mm以下の砂粒を多く含む。	
11	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高7.0・ 残存幅5.18・ 最大厚1.5	外面-横方向タガ貼り付け時のナデ。	淡乳褐色	やや軟	粗	直径1mm以下の砂粒を多く含む。	
12	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高4.3・ 残存幅7.55・ 最大厚1.8	外面-横方向貼り付け時の断続ナデ。内面-タテ方向ユビナデ	淡茶褐色	やや硬	粗	直径3.6mm以下の砂粒を多く含む。	
13	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高4.9・ 残存幅5.85・ 最大厚1.5	外面-タテハケ・横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-ユビオサエ・ナデ	茶褐色	やや硬	粗	直径5.5mm以下の砂粒を多く含む。	
14	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高5.8・ 残存幅6.1・ 最大厚1.8	外面-タテ・ナナメナデ。横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-ユビオサエ・ナデ	明乳褐色	やや硬	普通	直径3mm以下の砂粒を含む。	
15	埴輪	円筒埴輪	体部(タガ部分)	残存高6.3・ 残存幅5.9・ 最大厚1.25	外面-ナナメハケ (12本/cm)・横方向タガ貼り付け時のナデ。内面-タテ方向ユビナデ	明乳褐色	普通	粗	直径1.9mm以下の砂粒を多く含む。	
16	埴輪	不明形象埴輪		残存長5.45・ 残存幅6.4・ 最大厚1.6	外面-ユビオサエ。ヨコ・ナナメナデ。内面-タテナデ	明乳褐色	やや軟	粗	直径4mm以下の砂粒を多く含む。	
17	埴輪	蓋形埴輪土製品	立飾り基部か	残存長4.42・ 残存幅8.85・ 最大厚2.9	外面-ユビオサエ。側面-ユビオサエ・ヨコナデ	淡茶褐色	やや硬	やや粗	直径3mm以下の砂粒を多く含む。	
18	須恵器	杯身	口縁部～体部	残存高2.6・ 口径11.6	内外面-ロクロナデ	淡青灰色	やや硬	普通	直径4mm以下の砂粒を含む。	口端部欠損
19	土師器	坏A	口縁部～体部	残存高3.2・ 口径17.0	外面-口縁部はヨコナデ。体部上半はハラミガキ。体部下半はハラケズリ。内面-口縁部はヨコナデ。体部は放射状暗文	茶褐色	やや硬	精良	直径0.7mm以下の砂粒を僅かに含む。	

郡川西塚古墳 表面採集遺物観察表

4. 大窪・山畑18号墳出土遺物再整理調査

〔はじめに〕

本報告は平成5年度に八尾市教育委員会によって遺構確認調査を行い、調査後に消失した大窪・山畑18号墳出土遺物の再整理調査報告である。本遺物は既に出土遺物の報告がなされているが（八尾市教育委員会1994）、高安古墳群保存・活用事業において、調査を行うなかで、この中の1点が高安古墳群集中地域（「高安千塚」）においては、郡川16号墳にしか出土例がない土師器のミニチュア炊飯具の一器種の甕として、貴重なものであることが判明した。このため、このたび小片資料を含めて再実測・観察を行ったものである。

本墳は、高安古墳群集中地域の大窪・山畑南支群内の南西下方に所在し、北西方向に延びる尾根緩傾斜面の標高97m前後に立地する。墳丘・石室は大半を消失しており、玄室の奥壁を中心とする基底石が遺存するのみであった。玄室の奥壁幅2.3m、最大幅2.4m、最大残存長3.9mを測る。

〔遺物調査〕

大窪・山畑18号墳は調査前に既に大きな攪乱を受けていたため、1のミニチュア甕を除いては、流入土中から出土した。ミニチュア甕は、既報告に「奥壁と左側壁の接点部分に先端部を突っ込むような状態で出土した」とあり、唯一の石室内での原位置に近い位置にあったとみられる遺物である。他は石室内流入土からの出土であり、計8個体を実測することができた。

1の土師器ミニチュア甕は、完形品であり、ラップ状の口縁から体部に下るにつれて先細りになり、やや丸みを帯びた底部に至る形態をとる。後述するように、土師器ミニチュア炊飯具セットの一器種であり、土師器の高杯脚部と形態・製作技法が共通する。また、体部の側面の口縁部から底部にかけて黒班が認められる。土師器ミニチュア甕（1）については、考察1において詳述したが、類例が本例の他には、奈良県の2例のみである特異なものであり、いずれも6世紀前半から中頃の時期に位置付けられ、各古墳群の群中에서도初期の古墳から出土しているものである。

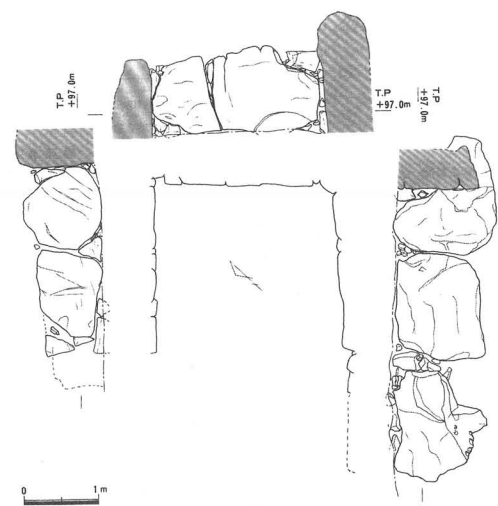
2.3の須恵器坏身は、口縁部の立ち上がりが内傾するものの、比較的高さを保っていることから、概ねTK10型式新段階期頃に位置づけられる。4の坏身は口端部が欠失するものの、やや短い立ち上がりとなるようであり、TK43型式期頃に位置づけられるものとみられる。5の坏蓋は、小片のため判然としないが、天井部が狭く、TK209型式期頃に位置づけられる可能性がある。

6は須恵器の坏であり、MT21型式期頃、7は土師器の椀で、飛鳥Vの段階頃に位置づけられる。8は土師器の羽釜であり、生駒西麓産の胎土であり、在地で製作されたものとみられる。小片のため判然としないが、7世紀代頃のものである可能性がある。

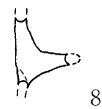
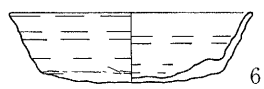
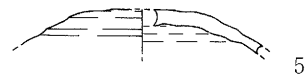
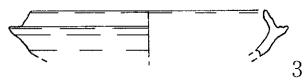
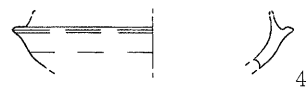
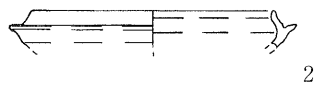
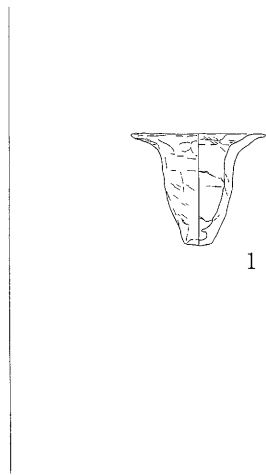
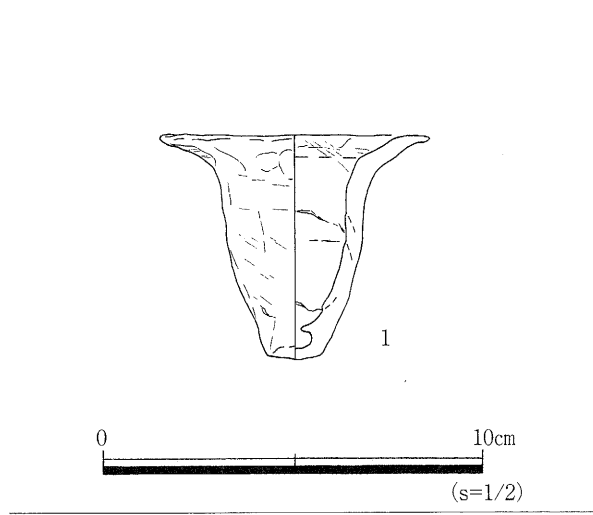
以上の所見から、1の土師器ミニチュア甕に伴う遺物としては、2.3のTK10型式新段階期頃の須



第12図 大窪・山畑18号墳位置図



第13図 大窪・山畑18号墳
石室実測図（1/100）



第14図 大窪・山畑18号墳遺物実測図

恵器坏身が挙げられ、高安古墳群集中地域の古墳でも初期段階の遺物とみられることから、6世紀中葉頃の初葬時の副葬土器の可能性が高い。4のTK43型式期頃の須恵器坏身は6世紀後半頃、5のTK209型式期頃の須恵器坏蓋は、6世紀末頃のいずれも追葬に伴う副葬土器と考えられる。

また、6の須恵器坏、7の土師器碗は7世紀末から8世紀初め頃のものであり、8の7世紀代かとみられる羽釜とともに、上記の土器群とは时期的に新しいものではあるが、高安古墳群においては、8世紀前半頃まで、追葬ないしは追祭祀に伴うとみられる土器が石室内から出土することから、これらの土器も同様に位置づけられる。

〔まとめ〕

既報告においても指摘されていたが、本石室の玄室幅は周辺の大窪・山畑支群の石室の玄室幅と比べて広い。大窪・山畑支群の石室規模の判明している石室30基中でも、大窪・山畑18号墳の玄室奥壁幅、2.3mを超える玄室幅をもつ石室は3基のみであり、他はこれよりも幅が狭い。このことから、大窪・山畑18号墳は、初葬時の副葬土器とみられるミニチュア甕や須恵器坏身の時期が示すように、玄室平面プランが、玄室幅指数の高い、方形に近いプランの古式石室であった可能性を示す。このような古式の石室は6世紀後半をピークに造墓される高安古墳群集中地域においては、群中に数基程度あるが、大窪・山畑南支群においては、大窪・山畑21号・22号墳があり、いずれもドーム状天井を有する石室であり、大窪・山畑21号墳からはTK10型式期の須恵器坏蓋が表面採集されている。

今回、再整理調査を行った大窪・山畑18号墳も、その出土遺物や石室のあり方から、これらと同様の高安古墳群集中地域のなかでも初期の段階、6世紀中葉頃の石室であった可能性が高い。

高安古墳群集中地域においては、郡川16号墳に示されるように、その造営初期の段階の石室に、ドーム状の石室やミニチュア炊飯具といった渡来系の要素が強く認められる。大窪・山畑18号墳もこれらの初期の一群に含まれる石室として位置づけられ、郡川16号墳とともに、高安古墳群集中地域で、ミニチュア炊飯具を出土した古墳として重要である。

また大窪・山畑18号墳の石室の左側壁、最南端の石材には、長方形の矢穴の痕跡6箇所と石の割れ面がみられる。本墳の東側に所在し、発掘調査が行われた大窪・山畑29号墳（成海2009）の石室石材にも江戸時代後期とみられる矢穴と石の割れ面が確認されており、大窪・山畑18号墳も、この江戸時代後期頃に石材採取のために、石室が破壊された可能性がある。本墳の北東側の日宝寺墓地付近にも矢穴の残された石材が散布する古墳状地点があり、この付近で江戸時代後期頃から石室の石材利用のための石の採取が行われた痕跡を示すものとして、注意される。

（引用文献）

八尾市教育委員会 1994 『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』

成海佳子 2009 『高安古墳群 蘭光寺跡』（財）八尾市文化財調査研究会

番号	出土位置	種類	器種	部位	法量 (cm)	調整	色調	焼成	胎土		残存率(%) (口縁部)	備考
1	石室内 奥壁と左側壁の接点部分	土師器	ミニチュア甕	完形品	口径7.15 器高5.95	外面-口縁部はヨコハケのちヨコナデ、ユビオサエ、体部はヨコハケのち縦方向ナデ 内面-ヨコハケのちヨコナデ	淡橙褐色	普通	普通	直径2.5mm以下の砂粒を含む。	100	口縁部から底部にかけて黒班あり
2	石室流入土内	須恵器	坏身	口縁部~体部	口径12.8 残存高2.0	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ	青灰色	硬	普通	直径1.5mm以下の砂粒を含む。	10	
3		須恵器	坏身	口縁部~体部	口径12.4 残存高2.3	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ	暗青灰色	硬	普通	直径1mm以下の砂粒を含む。	10	
4		須恵器	坏身	口縁部~体部	残存高2.75 残存最大径15.0	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ	青灰色	硬	普通	直径2.5mm以下の砂粒を含む。	10	口端部を欠損
5		須恵器	坏蓋	天井部	残存高2.9	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ	暗灰色(内面青灰色)	硬	普通	直径2mm以下の砂粒を含む。	20	外面に自然釉付着
6		須恵器	坏	口縁部~底部	口径12.8 器高3.7	外面-口縁部から体部はロクロナデ、底部は不定方向ナデ 内面-ロクロナデ	淡青灰色	硬	やや良	直径3mm以下の砂粒を少量含む。	40	
7		土師器	碗	口縁部~体部	口径12.4 残存高2.5	外面-ヨコナデ、ユビオサエ 内面-ヨコハケのちヨコナデ	明橙褐色	非常に軟	普通	直径1mm以下の砂粒を含む。	10	
8		土師器	羽釜	頸部~鐙部	残存高3.75 残存最大径26.6	外面-ヨコハケのちヨコナデ 内面-タテ・ナナメナデ	茶褐色	やや軟	非常に粗	直径3.2mm以下の砂粒を多く含む。	5	生駒西麓産胎土

大窪・山畑18号墳 出土遺物観察表

Ⅱ. 服部川西地区測量調査報告（第16図～18図・別折添付図）

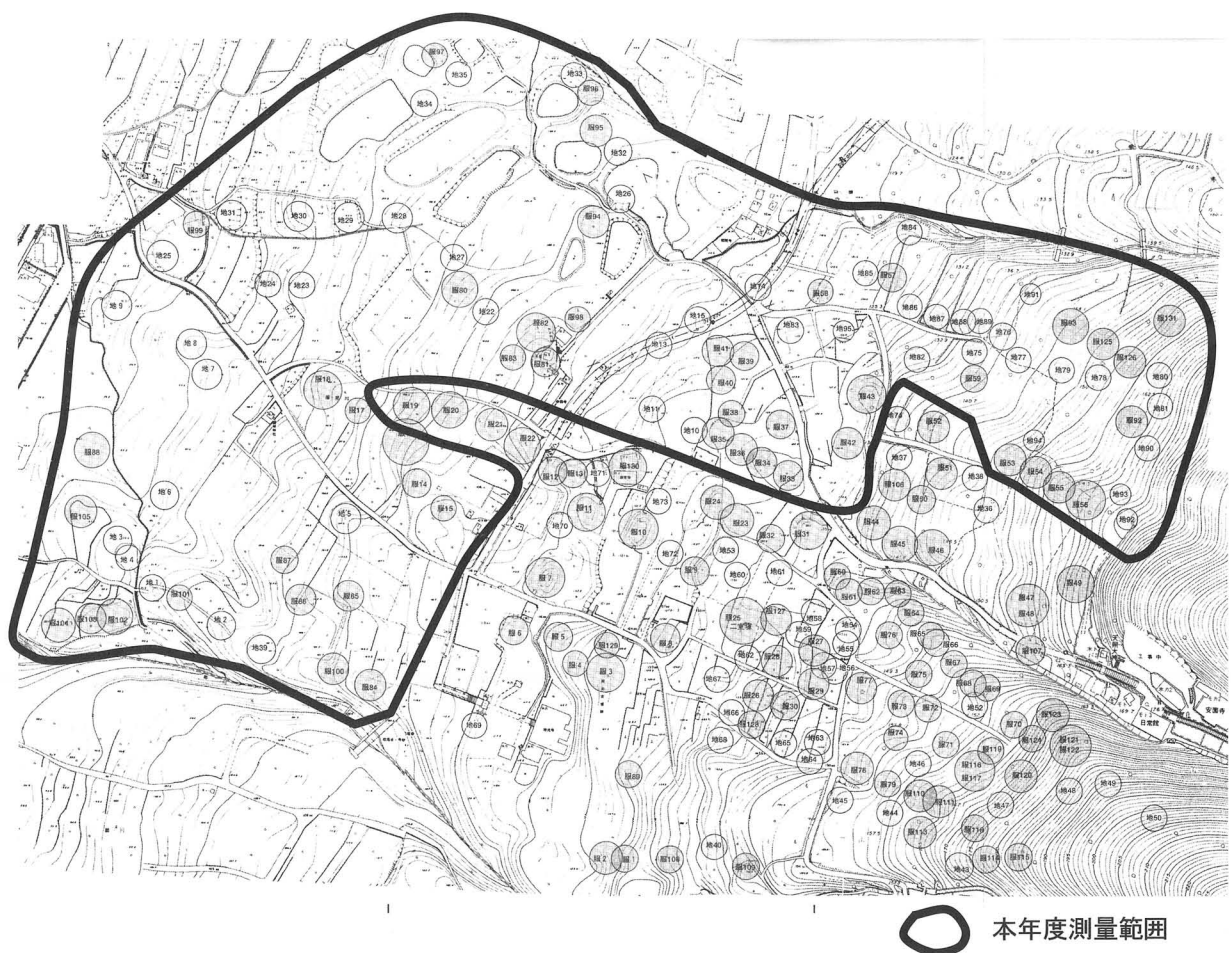
本年度は、昨年度行った服部川支群の東側地区に続いて、西側地区の範囲（第15図）について、測量を行った。測量は（株）相互技研に委託して平成21年6月1日～平成21年12月25日までの期間で行った。測量図作成の方法としては、大阪府砂防オルソマップデータをベースとし、古墳部分48箇所について現地で、1/250縮尺の測量図作成を行った。作成した測量図には、石室と墳丘のライン、古墳状地点の範囲を入れている。石室ラインについては、現地で地表に現れていない部分については、花田勝広氏による石室実測図（花田2008）を参考にして記入した。また、墳丘ラインについては、詳細分布調査の台帳を参考に、今回の測量図から推定したラインを記入している。

今回、作成した測量図によって、高安古墳群集中地域の服部川支群の古墳の測量はすべて完了し、支群全体のより詳細な立地状況を示すことができた。

第16図～18図は、昨年度の東側地区の測量図と合成した1/1000の縮小図面である。本年度行った西側地区の1/500の図は、付図として別折添付した。本測量図を基にして、今後、服部川支群のあり方の詳細な分析を行うとともに、今後の保存活用計画の資料として活用していきたい。

（引用文献）

花田勝広 2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13 八尾市教育委員会



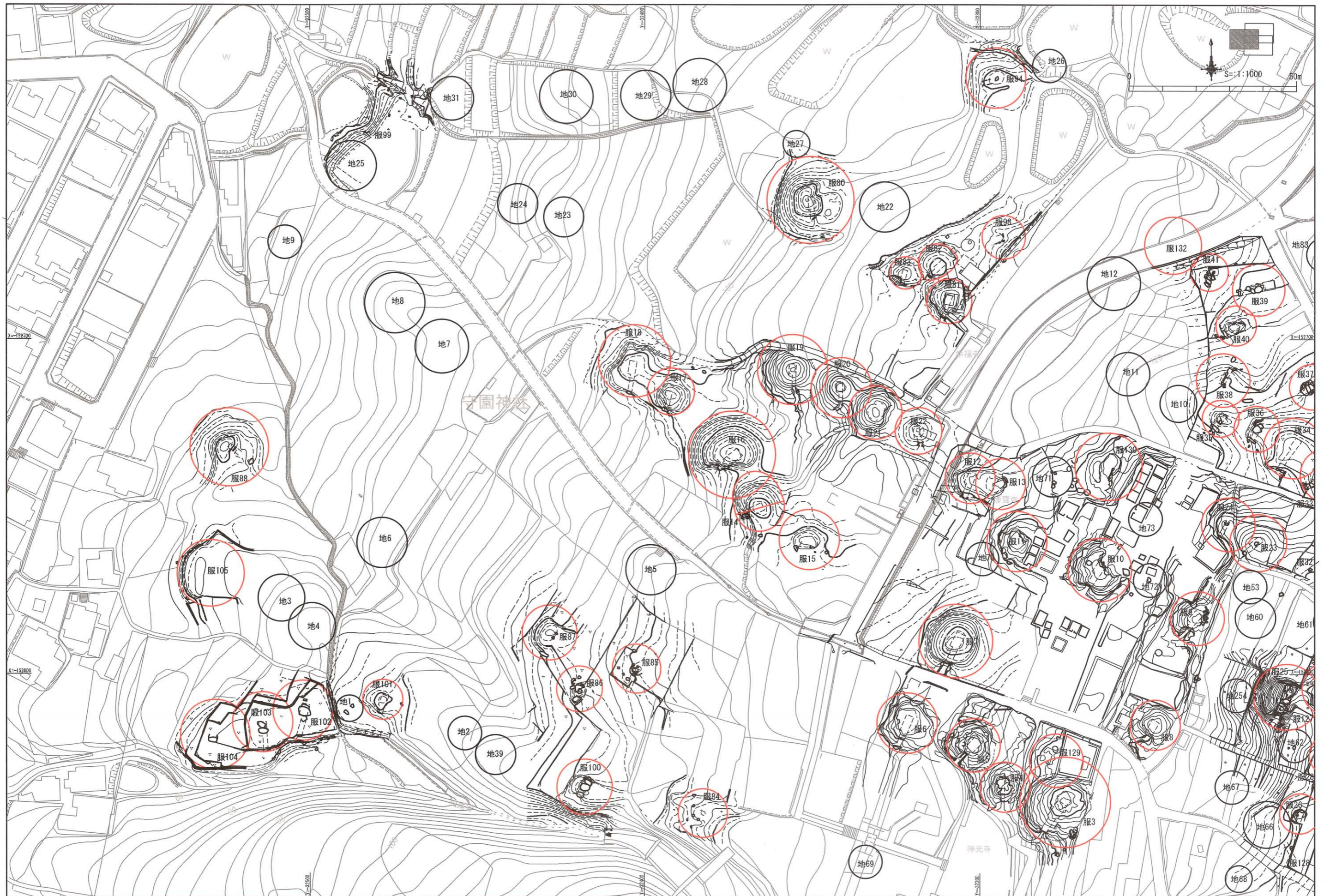
第15図 測量範囲図



第16図 服部川支群 測量図 (北東地区 1 / 1000)



第17図 服部川支群 測量図 (南東地区 1/1000)



第18図 服部川支群 測量図 (南西地区 1/1000)

Ⅲ. 高安古墳群・周辺立会調査報告

1. 大阪府農免農道服部川区間

本報告は平成21年12月16日に行った大阪府農免農道服部川区間の立会調査報告である。本区間では、平成17・18年度に（財）八尾市文化財調査研究会によって発掘調査が行われ（成海2009）、服部川12号墳から高安古墳群において初例となる外護列石が確認されている。本区間は、高安古墳群集中地域である「高安千塚」服部川支群の中心部にあたり、その施工にあたっては、服部川12号墳の外護列石と服部川22号墳の墳丘裾部の保存及び古墳群の景観を損なわない施工について、大阪府教育委員会文化財保護課、本市文化財課、大阪府農とみどり総合事務所耕地課との間で協議が行われ、古墳を保存し、現況道路の高さにできるだけ近い設計で施工されることとなった。施工にあたっては、古墳保存の注意を要する部分について、大阪府教育委員会の指示で、本市文化財課が立会調査を行うこととなった。

今回の報告は、道路西側の服部川22号墳に南接する擁壁の設置に伴う立会調査である。道路西側擁壁については、服部川22号墳の墳丘裾については設置しない設計とされた。今回立会調査を行ったのは、22号墳南側の谷状地形部分の擁壁基礎の立会である。立会調査を行ったところ、擁壁北端位置は、服部川22号墳の裾部手前となるが、余掘り部分が22号墳墳丘裾に抵触することが明らかとなった。このため、余掘り部分の掘削を中止し、擁壁の北端を1.5m南で止めることを協議し、府耕地課の了承を得た。

この際に、22号墳の墳丘盛土層の一部とこの下の整地層かとみられる土層と地山層を確認した。墳丘盛土層は腐植土である1層の直下にあり、南下がりの傾斜となっている。確認した墳丘盛土層は、軟質の明灰茶色小礫混粘砂である2層であり、この下の墳丘盛土層は、軟質の黄灰白色小礫混砂である3層で、厚さ50cmで存在する。3層は真砂土のようなきれいな土である。この下には、明灰茶色小礫混粘砂である4層がある。この土は通常、山麓でみられる地山の土とは異なる大礫の少ない粘性の高い土であることから、古墳造成時の整地層である可能性がある。4層は厚さ60cm前後あり、この下の標高109m以下で確実な地山層である硬質の褐灰茶色粘砂層の5層を確認した。

今回の土層断面の確認から、22号墳の墳丘裾は整地層の可能性のある4層と墳丘盛土層の最下層となる3層の間の標高109.7m付近であることが明らかとなった。

4層が整地層であるならば、古墳造成時に際して、尾根地形を利用しながらも、造成予定地の地形の谷部分に土を入れて平坦化し、その上に盛土を行って墳丘を造成したのではないかと考えられる。また古墳盛土最下層の3層が非常に軟質である点も注意される。

本調査で、標高109.7m付近に本来の墳丘裾を確認した。墳頂部の高さは、113.6mであることから、服部川22号墳の本来の高さは、約3.9mであったと考えられる。

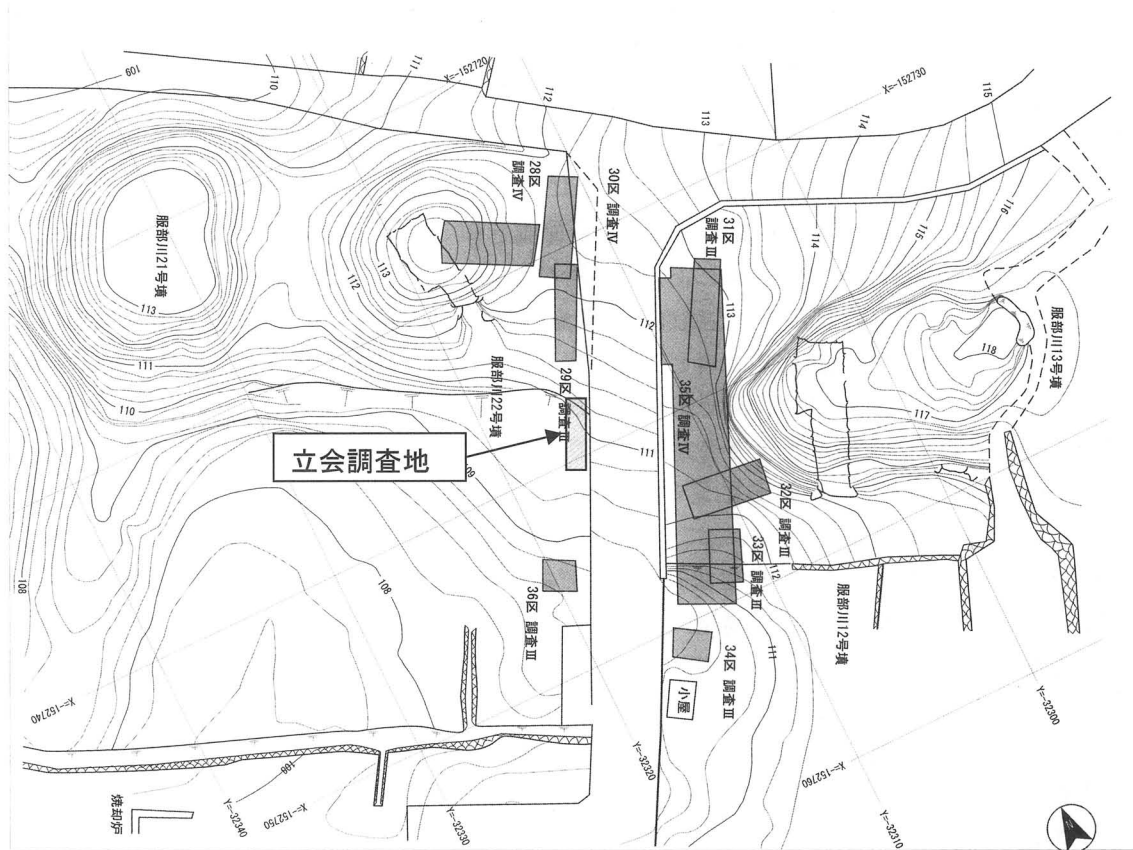
（引用文献）

成海佳子 2009『高安古墳群 蘭光寺跡』

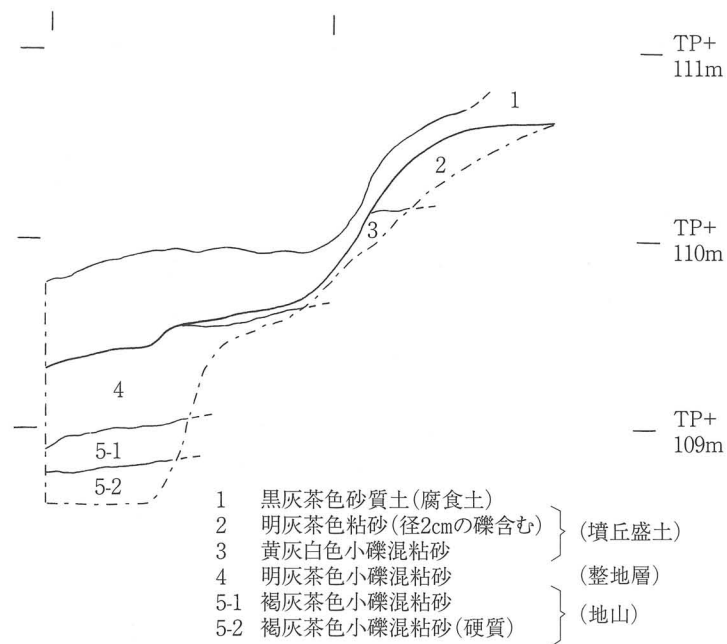
（財）八尾市文化財調査研究会



第19図 調査地位置図



第20図 立会調査地点付近地形図 ((財) 八尾市文化財調査研究会報告 2009 より転載・加筆)



第21図 立会調査地点西壁土層図 (1 / 40)

2. 服部川六丁目地内ガス管布設工事（20-433・水越遺跡）に伴う立会

－服部川西1号墳－

〔はじめに〕

本報告は、服部川6丁目地内のガス管布設工事に伴う立会調査報告である。本調査地からは、川西編年V期に位置づけられる円筒埴輪片等が出土し、5世紀第4四半期頃の古墳が存在していたことが確認されたが、本調査地の位置は、高安古墳群集中地域の「高安千塚」大窪・山畑南支群の西端付近にあり、近接して服部川133号墳や、大窪・山畑59号墳（長者の箸塚古墳）推定地がある。

このことから、「高安千塚」の範囲には、その造墓開始期である6世紀第2四半期頃より前の段階の古墳が所在したことが明らかとなった。このため、本墳について、「高安千塚」内の古墳番号とは別に、服部川西1号墳の名称を付した。また、「高安千塚」出現前段階の古墳である本墳の存在は、「高安千塚」の造営背景を考えるうえでも重要であることから、ここに報告するとともに、考察2において、詳細に検討することとした。

さて、本調査地の立地は、北西方向に延びる緩やかな尾根上地形の頂部から北側の浅い谷状地形に移行する部分にあたる。標高44.8m～43.8mを測り、緩やかに北に向かって下がる。立会調査した20mの区間のうち、北端を除く15mの区間（第23図A～F地点）において、地表下0.3～0.9m前後で円筒埴輪片、形象埴輪片と須恵器の坏・甕の破片が出土した。また、これと同一の高さで径40～60cm前後の花崗岩の大礫が多く確認された。このため、当初、石室石材の可能性が考えられたため、土層の精査を行ったところ、大礫の存在する土層は埴輪を含む層よりも層位的に上位であることが確認できたため、引き続き工事区間の立会を行い、遺物の収集と土層図の作成を行った。

〔調査概要〕

埴輪片を最初に確認したB地点では、地表下0.3～0.8m前後の灰茶系色粘砂の6～7層と灰色粘砂の9層から、礫と共に円筒埴輪片・蓋形埴輪片が出土した。この層の北側では径40～60cmの花崗岩の大礫がみられたが、この下の8層は軟質の淡灰黄色粘砂である。この8層は6・7層より層位的に下であり、9層よりは上となる。9層の下には暗灰色粘砂の10層があり、確認した範囲では埴輪片を含む遺物はみられず、山側の東から西へ下がる土層であった。調査区が狭小であるため、十分な確認はできなかったが、10層は東から西へ下がる旧地形あるいは古墳の裾部を構成する土層の可能性があり、この上に埴輪片や花崗岩の大礫を含む土層が堆積する状況を確認したのではないかと考えられる。B地点の北3mのC地点では、地表下0.15～0.6mの灰茶色粘砂の4～2層から13世紀頃の土師器小皿片が出土し、この下の黄灰茶色粘砂である5層から蓋形埴輪片・須恵器片が出土した。また、B地点から



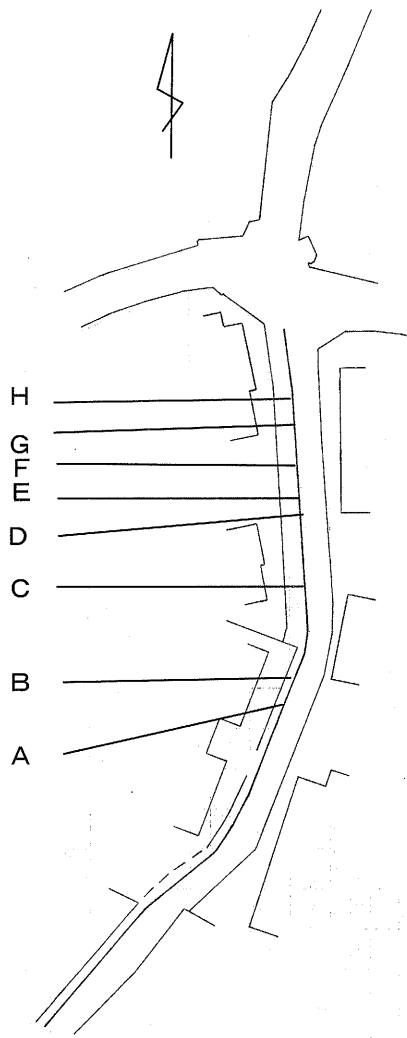
第22図 位置図

C地点の間の掘削においても、50 cm大の花崗岩の大礫がみられた。

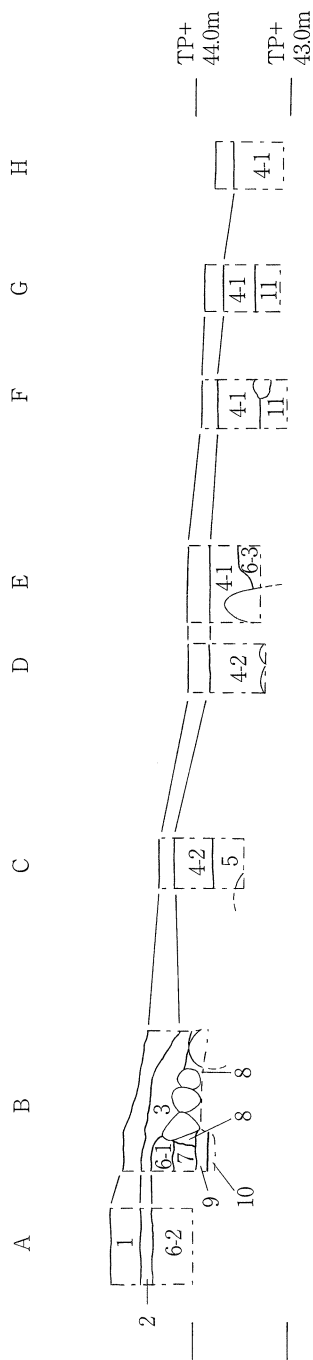
C地点の北3 mのD地点では、地表下0.25～0.9 mの灰茶色粘砂の4～2層から家形埴輪片・盾形か
とみられる形象埴輪片が出土した。また、D地点の北のE地点においても、地表下0.5～0.8 mの灰茶
色礫混粘砂である6～3層において、礫の下から埴輪片が出土した。

埴輪片・須恵器片が出土したのは、B地点からE地点までの13 mの間であり、これより北のF～
H地点では、近現代の土層の下に地山である11層を確認したのみである。埴輪片・須恵器片が出土し
たのは、尾根地形の頂部から北へ下る斜面部分である。このことから、服部川西1号墳は尾根上にその
地形を利用して造られた埴輪を樹立する古墳であり、後世に削平され、尾根上から谷部下方に埴輪片が
転落したものと考えられる。埴輪片より上位にあった花崗岩の大礫は、F～H地点で確認された地山で
ある11層にも含まれることから、削平された服部川西1号墳の墳丘構成層であった地山に含まれてい
た大礫とみられる。

また、もうひとつの可能性として、この花崗岩礫が石室石材の転落石であるということも考えられ
るが、そうすると埴輪を伴う5世紀第4四半期頃の横穴式石室の存在を想定することとなる。後述する
ように、八尾市内における最古の横穴式石室は、円筒埴輪編年のV期でも新しい段階の埴輪を有し、6
世紀第2四半期頃の築造と考えられる郡川東塚・郡川西塚古墳である。このことから、今回の調査成果
のみで5世紀第4四半期頃の石室の存在を想定することは難しく、地山に含まれていた花崗岩礫の流入
を確認したものとみておきたい。

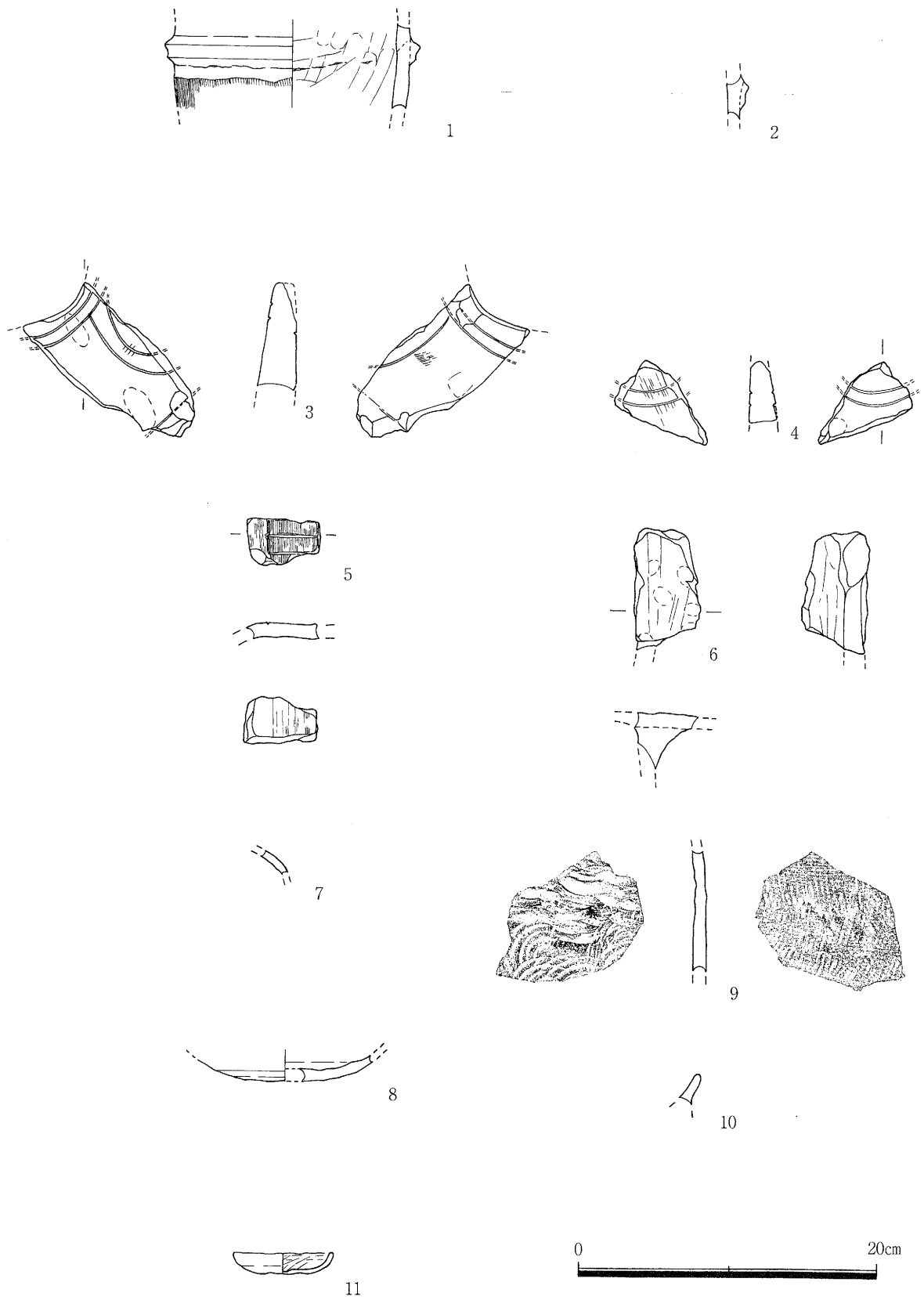


第23図 立会地点位置図 (1 / 500)



- 1 アスファルト・クラッシュヤー
- 2 茶灰色礫混粘砂層
- 3 黄灰色砂礫混粘砂層【現代】
- 4-1 灰茶色砂礫層(棧瓦・炭混)【現代】
- 4-2 同上(礫少なく粘性大)(土師器小皿片含む)【中世】
- 5 黄茶灰色粘砂層(埴輪・須恵器片含む)
- 6-1 灰茶色礫混粘砂層(埴輪片含む)
- 6-2 同上(色調やや明るい・40~60cmの花崗岩大礫あり)
- 6-3 同上(埴輪片含む・20cm前後の礫含む)
- 7 暗茶灰色礫混粘砂層
- 8 淡茶灰色礫混粘砂層(軟質の土・40~60cm花崗岩大礫あり)
- 9 灰黄色礫混粘砂層(埴輪片・10~20cm礫含む)
- 10 暗茶灰色礫混粘砂層(西下がりの土層)
- 11 灰茶色砂礫層(地山層か。40~60cmの花崗岩大礫あり)

第24図 調査区土層断面図 (↓ 1 / 80 ↔ 1 / 160)



第25図 出土遺物実測図 (1 / 4)

〔出土遺物〕

1はB地点の7層内下位から出土した円筒埴輪片である。暗茶褐色を呈し、須恵質の窖窯焼成の埴輪である。外面調整はタテハケのみであり、タガの断面形状は台形を保つ。2はB地点の7層から出土した円筒埴輪のタガ部の小片である。タガの断面形状は扁平な台形である。3はB地点の9層から出土した蓋形埴輪の立飾部の端片である。4はC地点の5層から出土した蓋形埴輪の立飾部の小片である。3.4は明橙色を呈し、焼成はやや硬質である。外面はハケメ調整ののちに、2本一組の線刻を施す。5はD地点の4-2層から出土した家形埴輪の壁部の小片である。明橙色を呈し、窖窯焼成である。壁面のコーナー部分の破片とみられる。外面は密な縦方向のハケメの後に梯子状の線刻を施す。6もD地点の4-2層から出土した。盾形埴輪かとみられる形象埴輪片であり、円筒部との貼り付け部分の破片であり、盾面になる可能性の部分は平坦である。明橙色を呈し、焼成はやや軟質である。外面の調整は縦方向のハケメのち縦方向のナデとユビオサエであり、当該破片部分には線刻は確認できない。7はC地点の5層から出土した須恵器の壺の肩部かとみられる小片である。暗青灰色を呈し、硬質である。8もC地点の5層から出土した。須恵器の坏身の底部片である。青灰色を呈し、やや硬質である。口縁部が遺存していないため判然としないが、須恵器編年のMT 15型式からTK 10型式期のものである可能性がある。9もC地点の5層から出土した。須恵器の甕の体部片である。青灰色を呈し、硬質である。外面は平行タタキの後に粗いナデを行う。内面には同心円文当て具痕が遺存する。体部小片であるため判然としないが、8と同時期位のものと考えても違和感のないものであろう。10はD地点5層より出土した土師器の羽釜あるいは甕の口縁部小片である。茶褐色を呈する生駒西麓産の胎土であり、硬質である。小片のため時期は判然としないが、出土須恵器の時期と同時期として違和感のないものとみられる。11はC地点の4-2層から出土した13世紀頃の土師器小皿片である。淡乳褐色を呈し、軟質である。全体にナデ調整を行い、内面には仕上げナデがみられる。底部内外面は、ユビオサエを行う。

〔まとめ〕

以上みてきたように、服部川西1号墳の埴輪は、円筒埴輪のタガが台形を保ち、貼り付けのための断続ナデ技法等も認められない。また蓋形埴輪・家形埴輪はハケ調整ののちに線刻を施し、比較的丁寧な作りである。このことから、円筒埴輪編年V期の山麓の埴輪のなかでも断続ナデ技法が多用され、タガが極端な扁平となる円筒埴輪や、立飾部がナデ調整のみで無文となる蓋形埴輪を有する郡川東塚古墳よりも明らかに古い時期のものとして位置づけられる。山麓の古墳の中でもV期の古い段階、須恵期編年のTK 47型式期の時期と考えられる大竹に所在する鏡塚古墳出土の円筒埴輪は、台形からやや扁平な台形のタガをもち、断続ナデ技法はみられない。また、蓋形埴輪の立飾部片はハケ調整の後に2本一組みの線刻を行うものである。また、焼成が窖窯焼成ではあるが、円筒埴輪は灰色を呈し、形象埴輪が橙色を呈する点も両墳は共通している。このことから、服部川西1号墳の埴輪は、鏡塚古墳の埴輪の時期に近いものと考えられ、5世紀第4四半期頃に位置づけられる。

また6～10の須恵器・土師器については、埴輪と同時期かやや新しい時期のものであり、同時期とすれば、服部川西1号墳に伴うものとみてよいだろう。

今回の調査は、ガス管布設替えに伴う立会調査という狭小な調査区の調査ではあったが、5世紀第4四半期頃の埴輪を樹立する古墳の存在を確認することができた。

山麓部の特に高安古墳群周辺では、今回の調査例のように、小規模な土木工事においても、古墳の痕跡等が確認される可能性が高く、今後も注意していく必要がある。

番号	調査地点	出土土層	種類	器種	部位	法量 (cm)	調整他	色調	焼成	胎土	残存率 (%) (口縁部)	
1	B地点	7層 下位	埴輪	円筒埴輪	体部	最大径17.3・ 残存高5.8	外面-タテハケ (8本/cm)。 横方向のタガ貼り付け時のナ デ。内面-ユビオサエ・ナデ	暗茶褐色(内 面 茶褐色)	硬 (須恵質)	良	直径1.5mm以下の砂粒 を僅かに含む。	
2	B地点	7層	埴輪	円筒埴輪	タガ部分	残存高3.2 最大厚1.5	外面-横方向タガ貼り付け時 のナデ。内面-ユビオサエ	明橙色	硬 (須恵質)	やや粗	直径3mmの砂粒を多く 含む。	
3	B地点	9層	埴輪	蓋形埴輪	立飾り	残存高7.4 最大厚2.6	両面に線刻文様あり。不定方 向ハケメ (8本/cm)・不定方 向ナデ	明橙色	やや硬	普通	直径2mm以下の砂粒を 含む。	
4	C地点	5層	埴輪	蓋形埴輪	立飾り	残存高4.25 最大厚1.9	両面に線刻文様あり。不定方 向ハケメ (7本/cm)・不定方 向ナデ	明橙色	やや硬	普通	直径3mm以下の砂粒を 含む。	
5	D地点	4-2層	埴輪	冢形埴輪	壁部	残存高3.1 最大厚1.0	外面に梯子状の線刻あり。外 面-タテハケ (10本/cm) の ちナデ 内面-タテハケ (12 本/cm)	明橙色	やや硬	粗	直径2mm以下の砂粒を 多く含む。	
6	D地点	4-2層	埴輪	盾形埴輪か		残存高8.1 最大幅4.4	外面-タテハケのち縦方向ナ デ・ユビオサエ 内面-縦方 向ナデ	明橙色	やや硬	粗	直径7mm以下の砂粒を 多く含む。	
7	C地点	5層	須恵器	壺	肩部	残存高1.6	内外面-ロクロナデ	暗青灰色	硬	普通	直径1.5mm以下の砂粒 を含む。	
8	C地点	5層	須恵器	杯身	底部~体部 の一部	残存高1.85	外面-底部はロクロヘラケズ リ・一部不定方向ナデ 内面 -ロクロナデ	青灰色	やや硬	やや粗	直径2mm以下の砂粒を 極く僅かに含む。	
9	C地点	5層	須恵器	甕	体部	残存高8.3	外面-平行タタキのち粗いナ デ消し内面-同心円文状当て 具痕残存	青灰色	硬	普通	直径3mm以下の砂粒を 含む。	
10	D地点	5層	土師器	羽釜もしくは は甕	口端部	残存高2.1	外面-横方向ナデ 内面-ヨ コハケ	茶褐色	硬	粗	直径3mm以下の砂粒を 多く含む。	
11	C地点	4-2層	土師器	皿	口縁~底部	口径6.5 器高1.45	外面-口縁部は横方向ナデの ち斜め方向上げナデ。体部~底 部は縦方向ナデ。底部中央は ユビオサエ。内面-横方向ナ デのち斜め方向仕上げナデ。 底部中央はユビオサエ。	淡乳褐色	軟	良	直径1mm以下の砂粒を 僅かに含む。	20

出土遺物観察表

IV. 考察

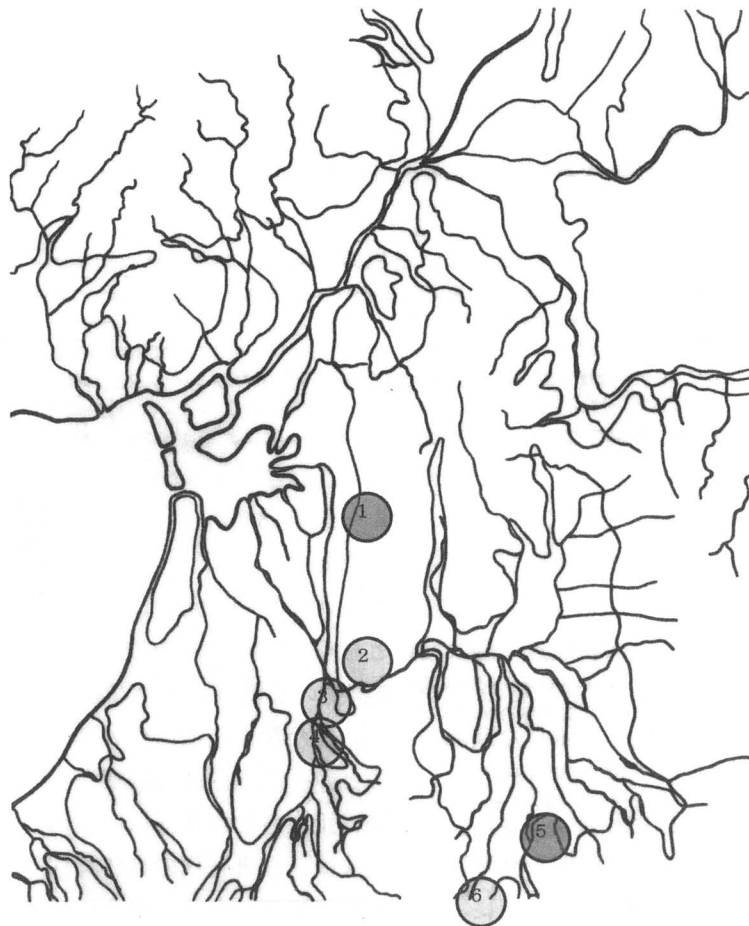
考察1 大窪・山畑18号墳出土のミニチュア炊飯具の甕について はじめに

大窪・山畑18号墳は、平成5年に八尾市教育委員会によって発掘調査された、高安古墳群の集中地域（高安千塚）の大窪・山畑南支群中の一古墳である（八尾市教育委員会1994）。調査時には既に墳丘を失っており、埋葬施設の横穴式石室も玄室の基底石のみが遺存している状態であった。古墳自体から得られる情報は少ない。しかしながら、流入土中の土器片とは別に、奥壁と左側壁の接点部分から、特異な土師器のミニチュア甕が出土していることが注目される。後述するが、これは土師器の高杯脚部と形態及び製作技法が共通するものである。そこで、このミニチュア甕の分布、時期的位置づけ、製作技法などから、これが副葬された大窪・山畑18号墳の性格について考えてみたい。

1. 分布

ミニチュア炊飯具セットは、畿内とその周辺地域で現在93例が報告されている。しかしながら、このような特異なミニチュア甕の類例は、本資料を含め、現在3例のみである（第26図）。大阪府内では本資料のみであり、残りの2例は奈良県高市郡明日香村真弓スズミ1号墳（明日香村教育委員会2008）と同高取町与楽ナシタニ1号墳（奈良県立橿原考古学研究所1987）出土品である（第27図）。与楽ナシタニ1号墳は、奈良盆地の南辺、貝吹山の南麓に広がる与楽古墳群中の一古墳である。真弓スズミ1

号墳は、与楽ナシタニ1号墳の立地する貝吹山の南麓と越智谷を挟んで対峙する丘陵上に立地しており、両古墳は地理的に近接している。両古墳が立地する奈良盆地南辺地域は、穹窿状の横穴式石室を有する古墳が多く所在し、さらにミニチュア炊飯具や釵子の副葬が顕著であることから、渡来系集団との関わりが強い地域である。両古墳から出土したミニチュア甕もミニチュアの竈・甑と相伴しており、ミニチュア炊飯具の一器種だと考えられている。したがって、大窪・山畑18号墳出土のミニチュア甕も同様に位置付けることができる。さらに、大窪・山畑18号墳出土品は底部が丸みを帯び、単体では自立しえない。このため



- | | | |
|------------------------|-----------|------------|
| 1. 高安古墳群 | 2. 平尾山古墳群 | 3. 飛鳥千塚古墳群 |
| 4. 一須賀古墳群 | 5. 与楽古墳群 | 6. 巨勢山古墳群 |
| (ミニチュア炊飯具を2例以上出土した群集墳) | | |

第26図 大阪府・奈良県におけるミニチュア炊飯具の分布 (S = 1 / 500,000)

奈良県内の類例と同様に、本来は、ミニチュアの甕とセットになっていたと考えられる。

2. 時期

次に、これらのミニチュア甕を出土した古墳の時的な位置づけを検討してみたい。まず、大窪・山畑 18 号墳については、石室内流入土からではあるが TK10 型式新段階の須恵器が出土している。さらに、与楽ナシタニ 1 号墳については、直接、年代を決定する資料を欠くが、立地や石室石材の大きさなどから支群中でも初期の古墳であると判断でき、MT15 型式から TK10 型式古段階期のもと考えられる。真弓スズミ 1 号墳については、与楽ナシタニ 1 号墳と類似したミニチュア甕の出土から、与楽ナシタニ 1 号墳に近い年代に位置づけ得る。以上のことから、これらのミニチュア甕は、ミニチュア炊飯具の副葬が行なわれる 6 世紀から 7 世紀前半の期間の中でも初期のものであり、6 世紀第 2 四半期から第 3 四半期頃のもので判断できる。

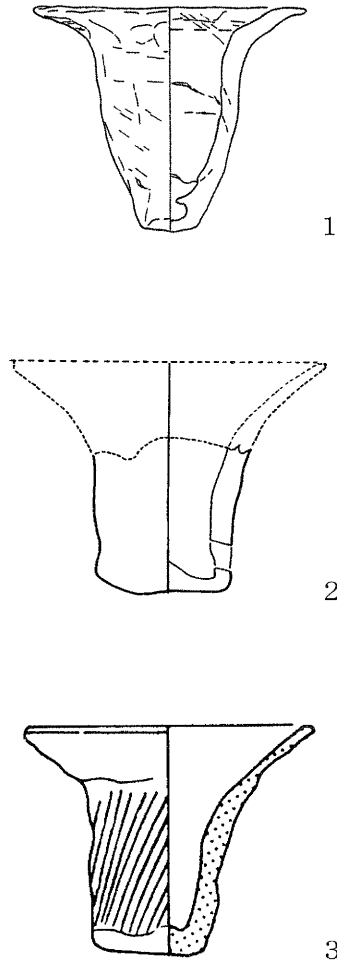
さらに、大窪・山畑 18 号墳が含まれる高安古墳群の集中地域（高安千塚）、与楽ナシタニ 1 号墳が含まれる与楽古墳群は、6 世紀後半を中心に古墳築造のピークを迎える後期群集墳である。このことからミニチュア甕を出土した古墳は、各古墳群内でも初期に位置づけられる。

3. 製作技法

今回、取り上げた大窪・山畑 18 号墳及び真弓スズミ 1 号墳、与楽ナシタニ 1 号墳出土のミニチュア甕は、土師器の高杯脚部と形態及び製作技法が共通している。そこで、まずは大窪・山畑 18 号墳出土のミニチュア甕を詳細に観察した結果を記し、その特異な形態及び製作技法を明らかにしたうえで、真弓スズミ 1 号墳及び与楽ナシタニ 1 号墳出土品との共通点、相違点に触れたいと思う。

まず、大窪・山畑 18 号墳のミニチュア甕の形態は、ラッパ状に開く口縁部から体部にかけて先細りしていき、やや丸みを帯びた底部に至る。また製作技法については、正位で見た場合、通常の土器とは異なり、粘土紐の単位が外傾していることが、体部内面の観察から分かる。このことから、本資料は倒立して製作されたと判断できる。その後、正立させた体部に口縁部（高杯の裾部にあたる）を接合して完成となる。このような形態及び製作技法は、6 世紀代の高杯脚部と共通しており、古墳の年代とも矛盾しない。しかしながら、仮に本資料が高杯脚部であった場合に想定される、杯部が欠損した痕跡は認められない。さらに、本資料の側面に口縁部から底部にかけて黒斑が認められることから、横位で焼成されたものと判断できる。このことから、本資料は、高杯脚部の製作技法を応用して、ミニチュア甕として製作されたものと考えられる。

一方、真弓スズミ 1 号墳・与楽ナシタニ 1 号墳出土品では、ラッパ状に開く口縁部は大窪・山畑 18 号墳出土品と共通するが、体部は円筒状で、底部は平坦である。このような形態差は、製作技法の違いによるものと考えられる。すなわち前者は、頸部方から底部方に向けて粘土紐を巻き上げる際に、その



- | |
|--------------|
| 1. 大窪・山畑18号墳 |
| 2. 真弓スズミ1号墳 |
| 3. 与楽ナシタニ1号墳 |

第27図 ミニチュア甕の類例 (S= 1 / 2)

まま底部を取束させているが、後者は粘土円盤を充填して底部を形成している（第28図）。このように、高杯脚部の製作技法を応用したミニチュア甕であっても、二通りの製作技法が見られることが分かる。

4. 小結

以上、高杯脚部と形態及び製作技法が共通するミニチュア甕を出土した大窪・山畑18号墳の性格を、類似したミニチュア甕を出土した奈良県内の古墳と比較しながら検討してみた。その結果、このようなミニチュア甕は、類例が本資料を含め3例しかなく、高安古墳群の集中地域（高安千塚）と奈良県の奈良盆地南辺地域の非常に限定された分布を示すことが明らかになった。さらに、これらのミニチュア甕の副葬が6世紀前葉から中葉頃に集中し、時期的にも限定される可能性も指摘し得る。

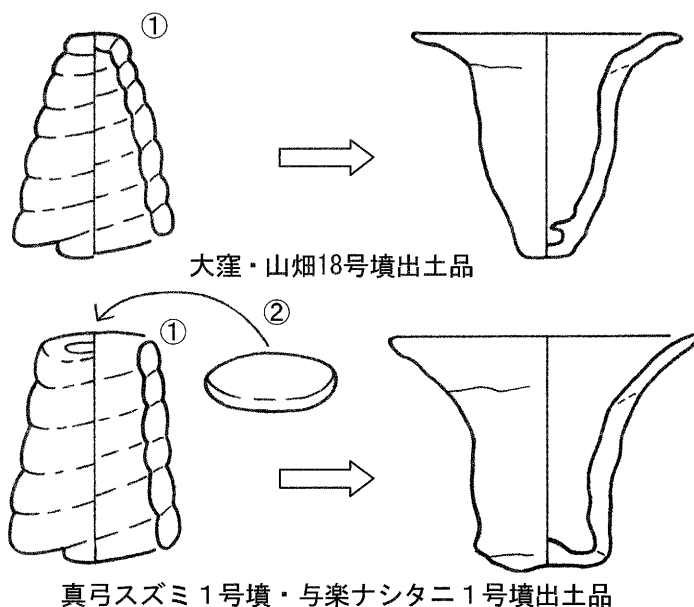
以上のことから、大窪・山畑18号墳の被葬者と、奈良盆地南辺地域の真弓スズミ1号墳、与楽ナシタニ1号墳の被葬者との間には、ミニチュア炊飯具を副葬した渡来系集団であることはもちろん、それ以上の何らかの結び付きがあった可能性がある。

この結び付きについて、更に考えていくために、大窪・山畑18号墳と同じ高安千塚内に所在し、時期的にも近いTK10型式古段階期の郡川16号墳出土の曲げ底系竈と、大窪・山畑18号墳と類似したミニチュア甕を出土した与楽ナシタニ1号墳出土の曲げ底系竈に注目してみたい。

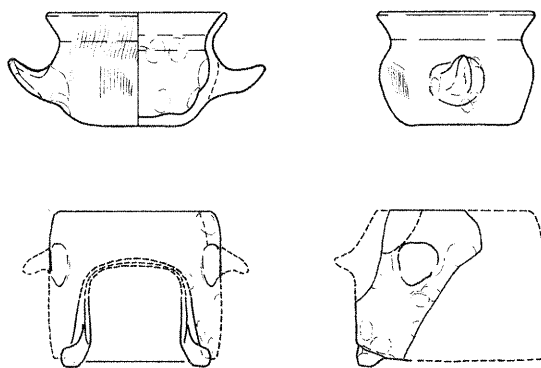
まず、郡川16号墳出土の曲げ底系竈については、残存状態が悪く、曲げ底部分も失われている。しかしながら、内面の観察から、焚口の両側に支柱状の粘土帯を貼り付けていることが分かる。このような特徴は付け底系竈には見られず、曲げ底系竈固有の特徴であるため、本資料も曲げ底系竈であると考えられる（第29図）。

次に、与楽ナシタニ1号墳出土の曲げ底系竈については、焚口の上部を外方へ底状に屈曲させ、また焚口の両側内面に支柱状の粘土帯を貼り付けるなど、やはり付け底系竈には見られない諸要素が看取される（第30図）。

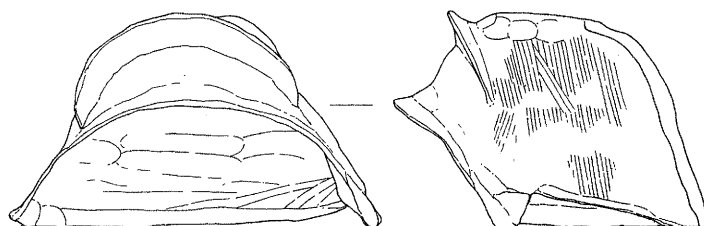
そもそも、実用品の曲げ底系竈は、高安古墳群が所在する生駒西麓



第28図 製作技法模式図



第29図 郡川16号墳出土ミニチュア炊飯具 (S= 1 / 4)



第30図 与楽ナシタニ1号墳出土ミニチュア甕 (S= 1 / 4)

地域に分布の中心があることが知られており、胎土の特色から見ても、この地で製作されたものと考えられている(稲田 1978)。一方、奈良県内で一般的な竈は、付け庇系である。ミニチュアの竈についても、曲げ庇系は与楽ナシタニ 1 号墳出土品が唯一であり、付け庇系竈が一般的な奈良県内にあつては極めて特異な存在である。このことは、大窪・山畑 18 号墳が所在する生駒西麓地域と、奈良盆地南辺地域との関わりを強く想起させるものである。しかしながら、与楽ナシタニ 1 号墳出土品は、本来、曲げ庇系竈に普遍的に見られるはずの下向き把手を欠き、曲げ庇上方に付け庇を付すなど、奈良県内の付け庇系竈の影響を受けたとも考えられる特徴を有する。このことから、この竈を副葬した与楽ナシタニ 1 号墳の被葬者と、生駒西麓地域との直接的な関係を想定することには未だ資料不足であろう。

しかしながら、高杯脚部の製作技法を応用したミニチュア甕の副葬という共通点や、与楽ナシタニ 1 号墳から生駒西麓に多く分布する曲げ庇系竈が出土したという点から、両者には渡来系集団であること以上の結び付きがあつたものと考えられる。このことは、ひいては高安古墳群の集中地域(高安千塚)の造営集団を中心とした生駒西麓地域の渡来系集団と、奈良盆地南辺地域の渡来系集団との間に何らかの有機的な関係があつたことを示しているものと思われる。

いずれにせよ、高杯脚部と形態及び製作技法が共通するミニチュア甕は、現在確認しうる限り 3 例のみの特異な遺物であるため、より具体的な様相を知るためには資料数の増加を待つ必要があり、今後の課題としたい。

(志田真吾)

(引用文献)

八尾市教育委員会 2009 『高安古墳群調査報告書』

明日香村教育委員会文化財課 2008 『明日香村遺跡調査概報 平成 18 年度』

八尾市教育委員会 1994 『八尾市内遺跡平成 5 年度発掘調査報告書 I』

ト部行弘 1991 「その他 土製品」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣

関川尚功 1988 「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』第 9 奈良県立橿原考古学研究所

奈良県立橿原考古学研究所 1987 『与楽古墳群』

稲田孝司 1978 「忌の竈と王権」『考古学研究』第 25 巻第 1 号

水野正好 1969 「滋賀郡所住の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』第 4 冊

考察2 「高安千塚」の造営背景について—前段階の山麓の埴輪を有する古墳の検討から—

はじめに

前章で記したように、「高安千塚」の大窪・山畑南支群の範囲内で、「高安千塚」出現前段階の埴輪を有する古墳の存在が確認され、服部川西1号墳として報告した。本墳は、立会調査によって埴輪片を確認したもので、本来の墳丘の規模や埋葬施設について知るすべはないが、出土した円筒埴輪は川西宏幸氏による円筒埴輪編年のV期でも古相を呈し、「高安千塚」出現の直前段階の郡川東塚古墳、郡川西塚古墳の円筒埴輪よりも明らかに古い様相をもつものであった。

郡川東塚・郡川西塚古墳からは、V期新相の円筒埴輪が確認されており、郡川東塚古墳からは、発掘調査によりMT 15型式からTK 10型式新段階の須恵器が出土しており、古墳の築造時期は6世紀第2四半期頃と考えられる。このことから、服部川西1号墳の時期は、郡川東塚古墳より古い時期の5世紀第4四半期頃と想定される。「高安千塚」の造墓開始の時期は、6世紀第2四半期頃と考えられ、すべてが横穴式石室を主体部とする古墳群であり、埴輪を有する古墳は全く確認されていない。

服部川西1号墳は、「高安千塚」の分布する範囲に、高安千塚出現前段階の埴輪を有する古墳が存在したことを示すものであり、その性格が注意される。

本稿では、「高安千塚」の造営背景について、その前段階の山麓の埴輪を有する古墳の検討から考える。このため、まずは八尾市山麓のV期の埴輪編年を整理したうえで、山麓の古墳の時期変遷、時期別分布を検討し、「高安千塚」前段階の山麓の埴輪を有する古墳の性格について考えていきたい。

1. 山麓のV期の円筒埴輪の細分編年（第31図）

山麓のV期の円筒埴輪を、須恵器編年を軸に細分したものが、第31図である。山麓のV期の円筒埴輪で、共伴須恵器が明らかなものは、MT 15型式からTK 10型式の須恵器が共伴した郡川東塚古墳の埴輪のみである。このため、平野部や近隣山麓の円筒埴輪を参考とした。

（山麓V期古段階）

山麓のV期の円筒埴輪のうち最も古いものは、山麓北部の大竹に所在する鏡塚古墳例である。これは直立気味の体部を有する器形で、台形からやや扁平な台形のタガをもち、外面調整はタテハケを主体とし、僅かに二次調整のヨコハケがみられる個体がある。形象埴輪の蓋形埴輪の立飾り部は、ハケメ調整の後に2本一組の線刻を施す。埴輪の焼成は窖窯によるが、灰色を呈するものと橙色を呈するものがある。鏡塚古墳例は、須恵器を伴わないが、平野部のTK 23型式の須恵器を伴う中田42次調査例、八尾南9号墳よりも新しく位置づけられる。

中田42次調査例は、器形全体が直立気味で、台形からやや扁平な台形のタガをもち、外面調整は一次調整のタテハケのみのもものと二次調整のB種とみられるヨコハケが施される個体がみられる。八尾南9号墳例は、扁平な台形から三角形のタガをもち、外面調整は一次調整のタテハケのみのもものを主体とし、二次調整のB種とみられるヨコハケが施される個体が僅かにみられる。この時期の周辺古墳としては、TK 23型式期の須恵器を伴う柏原市高井田山古墳出土の埴輪がある。この埴輪はやや扁平な台形のタガをもち、外面調整はB d種ヨコハケを主体とする。しかしながら、同時期の柏原市内の埴輪では、外面調整が1次調整のみの埴輪が小型品を中心に一般化していることが指摘されていることから（安村他1996）、中田42次調査例、八尾南9号墳例についても、川西編年IV期からV期古段階の埴輪が共存する同時期のものとみてよいであろう。鏡塚古墳例は、中田42次調査例、八尾南9号墳例と比べると、外面調整が圧倒的に一次調整のタテハケを主体とするものであることから、TK 47型式期頃、5世紀第4四半期頃のものと考えられる。

鏡塚古墳と同時期に位置づけられる山麓の埴輪としては、小片のため判然としないが、楽音寺遺跡例(89-167)、花岡山1次調査例、そして今回報告した服部川西1号墳例が挙げられる。服部川西1号墳例はやや扁平のタガをもち、胴部の器形は直立気味である。また、蓋形埴輪の立飾り部はハケメ調整のちに2本一組の線刻を行い、鏡塚古墳出土例と同じである。焼成は窖窯焼成で、円筒埴輪は灰色を呈するが、蓋形・家形等の形象埴輪は橙色を呈し、焼成のありかたも鏡塚古墳例と似る。

(山麓Ⅴ期中段階)

心合寺山古墳に西接する位置で出土した大竹西遺跡 2000 年市調査例がある。大竹西遺跡出土例は、器形のありかたから、東大阪市の芝山古墳出土円筒埴輪（関 2007）と近い時期とみられる。芝山古墳は、MT 15 型式期に位置づけられている（富山 2005）。タガはやや低平な台形で、器形は前段階よりも上方の外反度が強くなっている。この段階の中でもやや新相を呈するものとして、楽音寺 2 号墳出土例、恩智遺跡出土例、神宮寺 1 次調査出土例があり、器形の外反度が大竹西遺跡例、芝山古墳例よりも強く、タガに三角形のものがみられる。この段階は、MT 15 型式期、6 世紀第 1 四半期頃と考えられる。

(山麓Ⅴ期新段階)

TK 10 型式古段階の須恵器が相伴須恵器と考えられる郡川東塚古墳が、この段階の示準例となる。器形は全体に外反度の強いラップ状であり、顕著な断続ナデ技法による非常に扁平なタガをもつ。また出土形象埴輪の蓋形埴輪の立飾部は、ナデ調整のみで無文である。郡川東塚古墳出土の須恵器は、MT 15 型式期の須恵器坏身が 1 点、TK 10 型式古段階期の坏蓋が 2 点、TK 10 型式新段階期の坏蓋が 3 点出土している（藤井 2002）。MT 15 型式期の須恵器を伴う芝山古墳出土の円筒埴輪と郡川東塚古墳出土の円筒埴輪との型式差を鑑みれば、郡川東塚古墳の時期は、須恵器の TK 10 型式古段階期、6 世紀第 2 四半期頃と考えられる。

この段階の出土例としては、郡川西塚古墳例、郡川遺跡（97-696）例がある。郡川西塚古墳は、郡川東塚古墳の西に近接して位置する前方後円墳である。両墳とも、全長 60 m の主軸を揃えて北面する前方後円墳であり、主体部は初期横穴式石室である。郡川西塚古墳例は、今回報告した表面採集埴輪、既報告の表面採集埴輪（樋口 2006）のいずれも、顕著な断続ナデ技法による非常に扁平なタガをもち、郡川東塚古墳例と近似している。郡川西塚古墳から出土した須恵器は、東京国立博物館に所蔵されている須恵器坏身と台付短頸壺があり、中村浩氏によって検討され（中村 1991）、1 型式 5 段階（TK 47 型式）頃に位置づけられている。このことから、埴輪の示す時期と須恵器の時期の差が課題となるが、これらの須恵器が石室から出土したことが明らかであることから、古墳築造の時期よりも古い時期の須恵器が副葬品として納められていた可能性が考えられる。

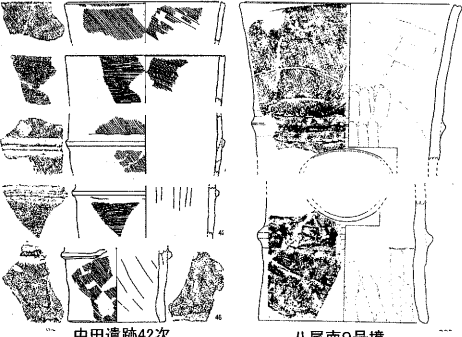
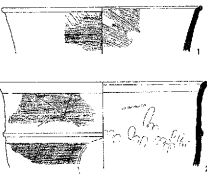
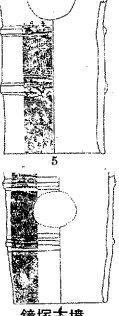
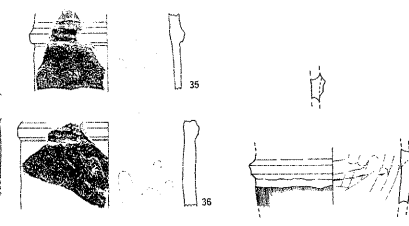
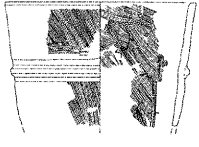
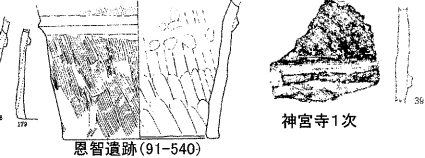
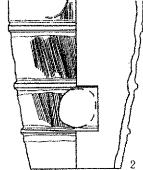
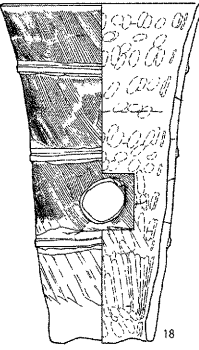
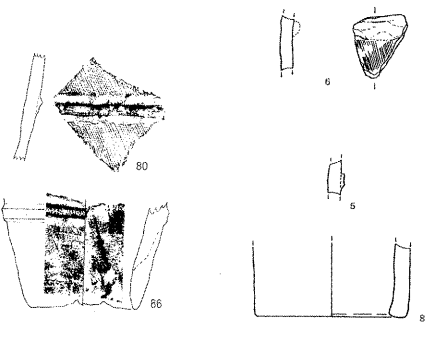
このことから、今後、両墳の副葬品等を含めてさらに検討を進める必要があるが、円筒埴輪の様相をみる限りでは、郡川東塚・郡川西塚の両墳は、ほぼ同時期の 6 世紀第 2 四半期頃に築造された可能性が高いと考えられる。

(まとめ)

以上みてきたように、八尾市山麓のⅤ期の円筒埴輪は、体部が直立気味を保つ器形で、台形からやや扁平な台形のタガをもつⅤ期古段階と、やや外反する器形をもち、扁平な台形から三角形のタガをもつⅤ期中段階、全体に外反度の強いラップ状の器形となり、顕著な断続ナデ技法による非常に扁平なタガとなる新段階の三つに細分することができる。

これは、円筒埴輪編年Ⅴ期の段階において、古段階では、成形段階において、粘土紐の巻上げ時に、乾燥単位を設けているため直立気味の器形ではあるが、徐々に乾燥単位が少なくなることで、上方の外反度が強くなっていくものと考えられる。新段階には、粘土紐を一気に巻き上げる成形技法が確立したことにより、全体にラップ状の器形となる。また、タガの貼り付けについても、古段階では、貼り付けナデによる台形を保っていたものが、徐々に貼りつけナデの粗略化が進み、新段階には、断続ナデ技法が確立することによって、非常に扁平なタガになるものと考えられる。

それぞれの段階は、須恵器型式編年から、Ⅴ期古段階が、TK 47 型式期頃の 5 世紀第 4 四半期頃に、Ⅴ期中段階が MT 15 型式期頃の 6 世紀第 1 四半期頃に、Ⅴ期新段階が、TK 10 型式期古段階頃の 6 世紀第 2 四半期頃に比定される。

須恵器編年 (田辺編年)	円筒埴 輪編年	山麓	平野部	参考
TK23	IV期～ V期古 段階		 <p>中田遺跡42次 八尾南9号墳</p>	 <p>柏原市高井田山古墳</p>
TK47	山麓V 期古段 階	 <p>鏡塚古墳</p>	 <p>花岡山1次 服部川1号墳(2008-433)</p>	
MT15	山麓V 期中段 階	 <p>大竹西遺跡(2000年市)</p>	 <p>楽音寺2号墳 恩智遺跡(91-540) 神宮寺1次</p>	 <p>東大阪市芝山号墳</p>
MT15～T K10古	山麓V 期新段 階	 <p>郡川東塚古墳</p>	 <p>郡川西塚古墳 郡川遺跡(97-696)</p>	

第31図 山麓のV期の埴輪編年表 (縮尺不同)

山麓の位置	古墳名・調査地名	所在地	標高	墳丘形状と規模	主体部	出土円筒埴輪時期・点数	出土形象埴輪	共伴須恵器の時期	調査主体・調査年	文献名
山麓北部(楽音寺・大竹古墳群)	大竹西遺跡2000年市調査	大竹5丁目143・146番	25m	不明	不明	体部片1(Ⅳ期)	なし	なし	八尾市教育委員会・2001年	『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書Ⅰ』(2001)八尾市教育委員会
	鏡塚古墳	大竹5丁目地内	17m	径28m円墳ないしは全長30m以上の前方後円墳	粘土柳か。他に石棺蓋出土。	円筒埴輪多数(Ⅴ期古段階)・朝顔形埴輪	蓋形埴輪・靱形埴輪?・家形埴輪?	なし	八尾市教育委員会・1979年	『大竹遺跡』(1980)八尾市教育委員会・『増補版八尾市史(前近代本文編)』(1985)八尾市史編集委員会
	楽音寺遺跡(89-167)	楽音寺5丁目67・65	26m	不明	不明	体部片1(Ⅴ期古段階)	なし	なし	八尾市教育委員会・1990年	『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』(1990)八尾市教育委員会
	花岡山遺跡1次調査	楽音寺5番地824番地他	60m前後	不明	不明	体部片2(Ⅴ期古段階)	なし	なし	(財)八尾市文化財調査研究会1987年	『八尾市文化財調査研究会報告22』(1989)(財)八尾市文化財調査研究会
	大竹西遺跡2000年市調査	大竹5丁目143・146番	25m	不明	不明	体部片2(Ⅴ期中段階)	なし	なし	八尾市教育委員会・2001年	『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書Ⅰ』(2001)八尾市教育委員会
	楽音寺2号墳	楽音寺2丁目40	34m前後	径13~14mの円墳	不明	口縁部・体部片7(Ⅴ期中段階)	不明形象埴輪?1	なし	八尾市教育委員会・1985年	『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』(1986)八尾市教育委員会
山麓中部	服部川1号墳(08-433・水越遺跡)	服部川16丁目地内	43~44m前後	不明	不明	体部片2(Ⅴ期古段階)	蓋形・家形埴輪・盾形埴輪?	不明	八尾市教育委員会・2009年	本報告書掲載
	郡川東塚古墳	郡川13丁目55	20m前後	全長60m前後の前方後円墳	横穴式石室(初期)	円筒埴輪多数(Ⅴ期古段階)・朝顔形埴輪	蓋形埴輪・不明形象埴輪	MT15・TK10古・TK10新(石室攪乱層)	(財)八尾市文化財調査研究会2001・八尾市教育委員会2000・2001	『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7』(2006)八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ』(2002)八尾市教育委員会
	郡川西塚古墳	郡川1丁目地内	15m前後	全長60m前後の前方後円墳	横穴式石室(初期)	円筒埴輪底部・体部片(Ⅴ期新段階)	不明形象埴輪1	TK47(石室内)・表面採集(MT15~TK10古)	(財)八尾市文化財調査研究会2001・八尾市教育委員会2010	『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7』(2006)八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・本報告書掲載
山麓南部	郡川遺跡(97-696)	教興寺5丁目35	10m前後	不明	不明	円筒埴輪底部・体部片7(Ⅴ期新段階)	なし	なし	八尾市教育委員会・2000年	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』(2001)八尾市教育委員会
	恩智遺跡(91-540)	恩智北町4丁目地内	30m前後	不明	不明	円筒埴輪底部・体部片5(Ⅴ期中段階)・朝顔形埴輪片1	なし	なし	八尾市教育委員会・1992年	『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅱ』(1993)八尾市教育委員会
	神宮寺遺跡1次調査	神宮寺5丁目179・180	15m前後	不明	不明	円筒埴輪体部片8(Ⅴ期中段階)	なし	なし	(財)八尾市文化財調査研究会1996年	『(財)八尾市文化財調査研究会事業報告57』(1997)(財)八尾市文化財調査研究会

山麓のⅤ期の埴輪一覧表

2. 5世紀後半から6世紀の山麓の古墳の変遷（44頁表）

ここでは、前項の山麓のV期の円筒埴輪編年に基づき、5世紀後半から6世紀代にかけての八尾市山麓の古墳の変遷をみていきたい。山麓では、5世紀前半の中河内最大の前方後円墳である楽音寺・大竹古墳群の心合寺山古墳築造後も、その周辺で小古墳が継続的に築造されている。心合寺山古墳に西接する大竹西遺跡（2000年市調査）では、円筒埴輪編年Ⅳ期とみられるB種ヨコハケをもつ円筒埴輪が出土しており、そのうち、心合寺山古墳の西200mの位置で、V期古段階の径28mないし全長30m以上の前方後円墳である鏡塚古墳が造られている。また同じV期古段階期には、心合寺山古墳の北東400mの位置で花岡山1次調査出土埴輪が、また心合寺山古墳の北400mの位置で楽音寺遺跡（89-167）出土埴輪が確認されている。さらに、その後、V期中段階では、心合寺山古墳に西接する大竹西遺跡（2000年市調査）出土埴輪がある。また心合寺山古墳の北100mの位置では、V期中段階でも新しい時期の埴輪を出土した径13～14mの円墳とみられる楽音寺2号墳がある。

このことから、心合寺山古墳の築造後の5世紀後半から6世紀第1四半期の時期まで、楽音寺・大竹古墳群では、心合寺山古墳と極めて近接した位置で、小古墳が築造され続けていることがわかる。4世紀後半の西ノ山古墳、花岡山古墳、そして5世紀前半の心合寺山古墳と続く、前方後円墳を築造した中河内の地域首長の系譜は、心合寺山古墳を最後に断絶ないしは縮小化したものとみられるが、心合寺山古墳築造後もこれに近接する小古墳が多く造られていることから、中河内の地域首長の拠点であったこの地域の集団の有力層は6世紀第1四半期頃まで、小古墳を造り続けていたものと考えられる。

一方、山麓の南側では、山麓の北側とは様相が異なり、5世紀代の古墳はほとんど確認されていなかったが、近年の踏査で教興寺東地区の標高260mの山地、尾根上の教興寺東1号墳で円筒埴輪編年Ⅱ期ないしはⅢ期に位置づけられる円筒埴輪が確認され、5世紀初頭前後の古墳の存在が明らかになった（八尾市教育委員会2006）。教興寺東1号墳は、径35m前後の円墳ないしは全長45mの前方後円墳とみられる。また近接する教興寺東2～5号墳も竪穴式石室ないしは木棺直葬の可能性が考えられる墳頂部の落ち込みがみられ、教興寺東1号墳に相前後する時期の古墳であった可能性が高い。これらの古墳群は、現在、教興寺東古墳群と仮称しているが、これまで確認されていなかった5世紀初頭前後の山麓南部の集団の有力者層の墓域として注意される。また、教興寺東古墳群のさらに南側の標高50mの山麓においても、恩智遺跡4次調査で、円筒埴輪編年Ⅲ期、5世紀前半頃の埴輪片が確認されている。またV期中段階の埴輪も、恩智遺跡（91-540）、神宮寺1次調査で確認されており、6世紀第1四半期頃の時期にも山麓南部に小古墳が営まれていることが確認できる。

このことから、八尾市山麓南部付近においても、楽音寺・大竹古墳群にみられる中河内の地域首長の核となったような集団ではないが、地域の小有力者層が5世紀代に存在し、途中の断絶はあったとみられるが、6世紀第1四半期頃にも存在したものと考えられる。

6世紀第2四半期頃に入ると、山麓北側の楽音寺・大竹古墳群付近では全く古墳の築造がみられなくなり、替わって山麓中部の郡川の地に、全長60mの前方後円墳である郡川東塚・郡川西塚古墳が出現する。ここに、従来から指摘されているようなこの地域の首長系譜の北から南への移動（秋山1992）が認められる。そして、郡川東塚・西塚古墳の築造直後に、TK10型式古段階期の初葬時須恵器を伴う郡川16号墳をはじめとする「高安千塚」の造墓が開始したと考えられる。

この北から南への首長系譜の移動は突如、行われたように見えるが、今回報告した服部川西1号墳は、この地、山麓中部の5世紀第4四半期頃の古墳である。未だ確認されていない古墳の存在の可能性も考えると、郡川東塚・郡川西塚古墳、「高安千塚」の立地する山麓中部には、これ以前の小古墳が存在した可能性が考えられる。また、山麓南部の小古墳の5世紀代からの系譜を考えると、山麓の中・南部の地域には、小古墳を営んだ在地の小有力者層の存在が伺える。

これまでみてきたように、6世紀第2四半期における郡川東塚・郡川西塚古墳の出現にみられる北から南への地域首長の系譜の移動、そして、大型群集墳の「高安千塚」の造墓開始といった現象は、当該期の中河内地域の政治的・社会的な変動を伺わせるものであるが、その前段階の5世紀代にも、山麓の中・南部に在地の小有力者層が存在しており、そこには、弱体ながらも在地集団による基盤が存在した

ものと考えられる。

「高安千塚」の出現の背景となった6世紀第1四半期までの山麓地域の様相について、さらに考えるため、山麓の古墳の時期別の分布について、平野部の古墳も視野にいれながら、みてみたい。

現段階で想定される年代	須恵器編年(田辺編年)	円筒埴輪	山麓北部(楽音寺・大竹古墳群付近)	山麓中部	山麓南部	山麓全体
4世紀		I期	向山古墳(円墳ないしは前方後円墳・約55m)			
		II期	西ノ山古墳(前方後円墳・約55m) 花岡山古墳(前方後円墳・約73m)			
5世紀		III期古	中ノ谷山古墳(前方後円墳もしくは円墳・約50m)		教興寺東1号墳(径35mの円墳もしくは45m前方後円墳)	恩智遺跡4次埴輪
	TK73	III期新～IV	心合寺山古墳(前方後円墳・160m)			
	TK216	IV期中				
	TK208	IV期新	心合寺山古墳西出土埴輪(2000年度市調査)			
	TK23	IV～V古				
5世紀	TK47	V(山麓古段階)	鏡塚古墳(径28m円墳もしくは30m以上の前方後円墳)	楽音寺(89-167)埴輪 花岡山1次埴輪 服部川西1号墳埴輪		
	MT15	V(山麓中段階)	大竹西(2000年度市)埴輪			
6世紀	TK10古	V(山麓新段階)	楽音寺2号墳	郡川西塚古墳 郡川東塚古墳(前方後円墳60m)	高安千塚造墓開始(郡川16号墳)	高安古墳周辺地域
	TK10新				恩智(91-540)1次埴輪 郡川(97-696)	
	TK43					
	TK209		愛宕塚古墳(円墳・径35m)			
7世紀	TK217					

山麓の古墳変遷表

3. 5世紀後半から6世紀の山麓の古墳の時期別分布（第32図）

ここでは、TK 23 型式からTK 47 型式期の5世紀後半頃、MT 15 型式期の6世紀第1四半期頃、TK 10 型式古段階期の6世紀第2四半期頃、TK 10 型式新段階からTK 209 型式期の6世紀後半頃の四つの時期別分布をみていきたい。

5世紀後半頃の時期では、やはり山麓北部の心合寺山古墳周辺に、鏡塚古墳をはじめとする小古墳が集中する。また、山麓中部においても、韓式系土器や鍛冶関係の遺物を出土した郡川遺跡の東側にあたる山麓の低所に、服部川西1号墳が造営されている。一方、平野部においても、東郷・中田遺跡群の集落に近接して、中田42次遺跡例の埴輪をもつ古墳が営まれている他、八尾南遺跡においても、八尾南4～13号墳といった埴輪を有する方墳が造られている。八尾南遺跡は、5世紀前半頃に馬飼い関係の集落であった可能性が考えられており、また、近接して古市古墳群との関係が考えられる長原古墳群が位置しており、やや特異な遺跡である。

6世紀第1四半期では、山麓北部の楽音寺・大竹古墳群では、楽音寺2号墳や大竹西遺跡出土例の古墳が認められ、継続して小古墳が造営されていることがわかる。また、山麓南部では、山麓の低所に、恩智遺跡(91-540)、神宮寺遺跡第1次調査で埴輪が確認されており、この時期に古墳が営まれていたことがわかる。

6世紀第2四半期には、これらの山麓の低所に分布した埴輪を有する古墳は姿を消し、山麓中部の郡川遺跡に近接して、全長60mの前方後円墳である郡川東塚・郡川西塚古墳が造営され、その直後に両墳の東1キロの山麓に「高安千塚」の造墓が開始する。郡川東塚・郡川西塚古墳は、初期横穴式石室を主体部とする古墳であるが、前方後円墳であり、埴輪を圍繞する。「高安千塚」は、ほとんどが円墳で、主体部はすべて横穴式石室であり、これまでの詳細分布調査においても、埴輪は全く確認されていない。一方、平野部では久宝寺遺跡群内の七ツ門古墳や、山賀遺跡内の山賀古墳、八尾南遺跡群内の八尾南3号・14号墳の小古墳が、集落に近接して造られている。

6世紀後半には、「高安千塚」の造墓が爆発的に行われる。現在、226基の古墳を確認している「高安千塚」の古墳のうち、恐らく8割以上はこの時期の造営である。「高安千塚」に西接する位置には、郡川遺跡の集落が前代から継続して営まれている。また、周辺の山麓においても、この時期の横穴式石室墳が散発的に分布し（高安古墳群周辺地域）、現在、80基近くを確認している。

一方、山麓北部には、6世紀末頃の独立墳で、府下最大の横穴式石室を主体部とする愛宕塚古墳が営まれている。本墳は、石室型式の示す時期が出土須恵器の型式が示す時期より新しいことをはじめ、評価が難しい古墳であり、ここでは多くを触れることはできないが、郡川東塚古墳・郡川西塚古墳の出現で一旦、南へ移動した当地域の首長系譜が、再度、北へ回帰したことを示す古墳と考えられている（秋山1992）。また、平野部では、萱振遺跡や亀井・竹淵遺跡で、集落に近接して古墳が営まれているが、木棺直葬を主体とする小古墳である。

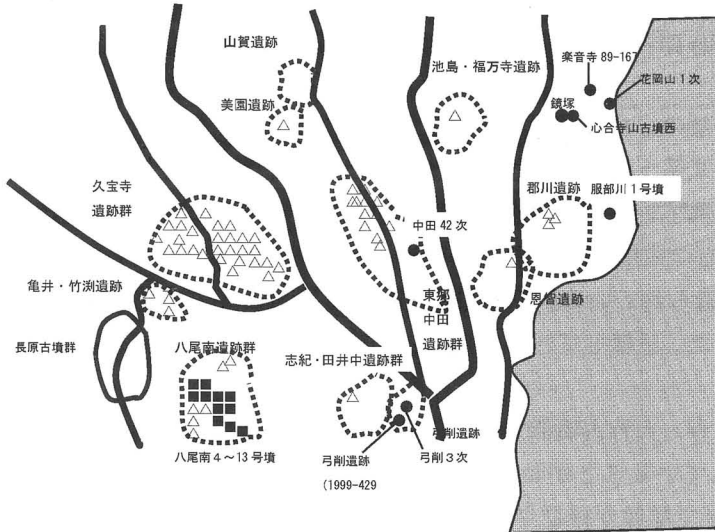
これまでみてきた時期別分布から伺えることは、6世紀第1四半期までは、山麓の低所に埴輪を有する小古墳が営まれていたが、6世紀第2四半期には、これらの在地の小古墳は認められなくなる。6世紀第2四半期に造営される郡川東塚・郡川西塚古墳は、山麓中部に突然出現するというその出現のあり方からも、その背景に何らかの畿内政権の関与が伺われるのであるが、初期横穴式石室を主体部としながら、前方後円墳という墳墓形式を持つ点に、中河内山麓地域の在地の地域首長としての性格が表出されていると考えられるのである。しかし、その直後に造墓が開始される「高安千塚」はほとんどが円墳であり、すべてが横穴式石室を主体部とし、埴輪を全くもたない点で、郡川東塚・郡川西塚古墳と強い繋がりを有しながらも、在地性という枠組みを超越した性格を伺うことができる。

4. まとめ

これまで、山麓のV期の円筒埴輪編年をもとにして、5世紀後半から6世紀にかけての山麓の古墳の変遷と時期別分布をみてきた。

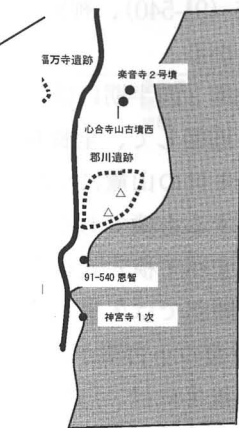
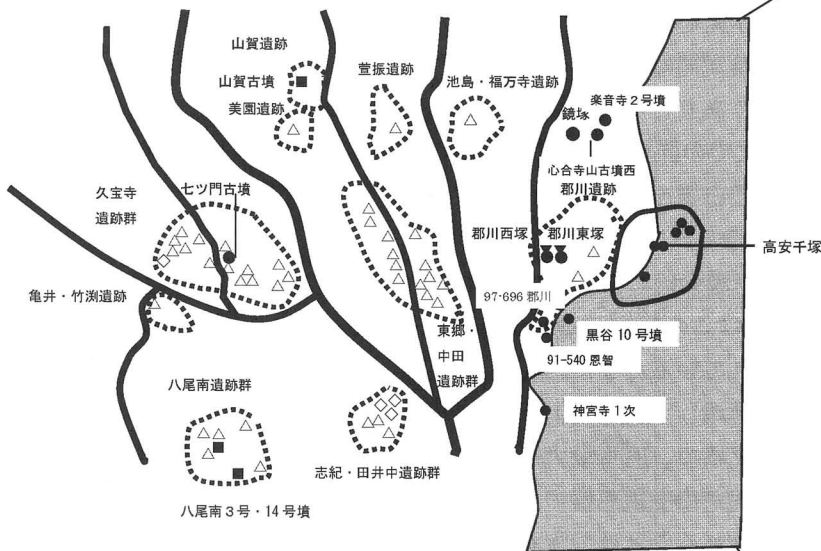
この結果、山麓には、心合寺山古墳築造後の5世紀後半から6世紀第1四半期頃まで、山麓北部の楽音寺・大竹古墳群に埴輪を有する古墳が継続して営まれ、これだけでなく、山麓の中・南部にも断続的

5 世紀後半頃 (TK208 ~ TK47 型式頃)



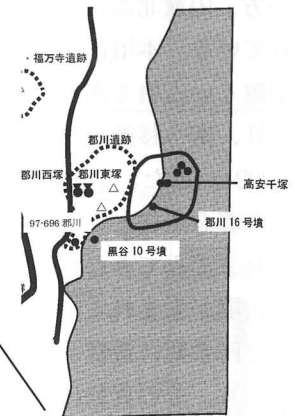
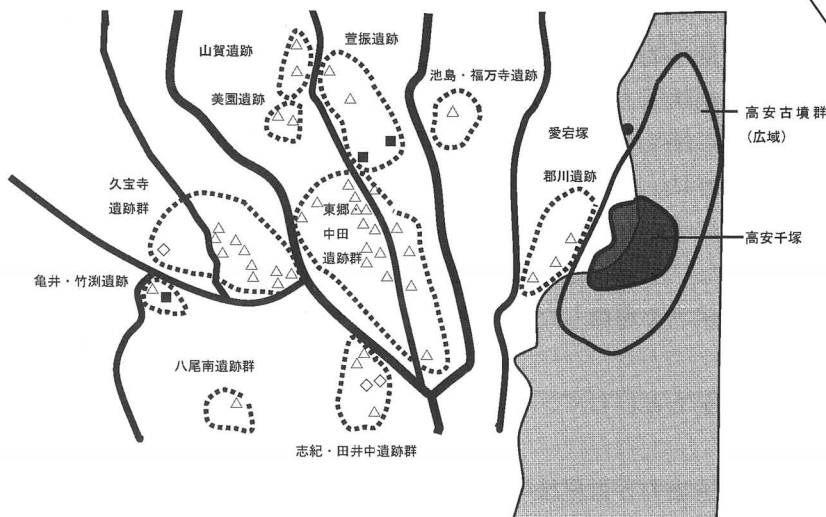
6 世紀第 1 四半期頃 (MT15 型式期頃)

6 世紀前半頃 (高安千塚開始期・MT15 ~ TK10 型式頃)



6 世紀第 2 四半期頃 (TK10 型式古段階期頃)

6 世紀後半 ~ 末頃 (高安千塚盛行期
TK10 新段階 ~ TK209 型式頃)



凡例

- 前方後円墳
- 円墳または墳形不明
- 方墳
- △ 集落遺構確認地点
- ◇ 水田遺構確認地点

第32図 5 世紀後半から 6 世紀の山麓の古墳の時期別分布

ながら埴輪を有する小古墳が営まれていることが明らかになった。これらは在地的な集団の有力者層の古墳であったと考えられる。ところが、6世紀第2四半期にはいると、様相は一変し、埴輪を有する在地の小古墳は全く姿を消し、山麓中部にのみ地域首長墓とみられる郡川東塚・郡川西塚古墳が造営される。そしてこの直後には、横穴式石室を主体とし、埴輪を有さない「高安千塚」の造墓が開始し、6世紀後半には爆発的に造営されるのである。この背景には、畿内政権による渡来系集団をも含む中河内の集団の再編成といった政治的・社会的な変動があったものと考えられる。

生駒西麓の「高安千塚」の北側、6世紀後半から7世紀にかけて造墓された東大阪市の山畑古墳群やみかん山古墳群においては、横穴式石室が多くを占めるが、竪穴式小石室等の埋葬施設もみられ、群中に埴輪を有する古墳も少数ではあるが認められる。

これらの古墳群と「高安千塚」との差異が、在地的性格の強弱を反映しているのかは、今後、周辺の群集墳との多角的な比較検討を要するところではあるが、「高安千塚」の出現の前段階には、山麓に埴輪を有する在地的な小古墳が営まれていたことが明らかであることから、「高安千塚」の造営背景には、在地の枠組みを越えた畿内政権による関与があったものと考えられる。

(吉田野乃)

(引用文献)

- 安村俊史 1996「高井田山古墳をめぐる諸問題 埴輪」『高井田山古墳』柏原市教育委員会
関真一 2007「生駒山西麓における円筒埴輪の様相」『埴輪論叢』第6号 埴輪検討会
富山直人 2005「芝山古墳の再検討」『考古学論集』第6号 考古学を学ぶ会
藤井淳弘 2002「郡川東塚古墳(2000-306)の調査」『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書I』八尾市教育委員会
樋口薫 2006「埋蔵文化財発掘調査報告 郡川東塚古墳 第1次調査」『八尾市立埋蔵文化財センター報告7』八尾市教育委員会(財)八尾市文化財調査研究会
中村浩 1991「大阪府八尾市郡川西塚古墳出土須恵器について-東京国立博物館保管資料の再検討-」『大谷女子大学紀要』第26号 第1輯
八尾市教育委員会 2006『高安古墳群分布・測量調査報告書』八尾市教育委員会
秋山浩三 1992「第6章河内 第1節北・中河内」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社



大阪府農免農道 服部川区間(擁壁設置状況北より)



大阪府農免農道 服部川区間(盛土工事状況北より)



大阪府農免農道立会 服部川22号墳 南接部分



大阪府農免農道立会 服部川22号墳 南接部分 土層断面(左が天)



服部川六丁目地内ガス管布設立会状況(南より・左が天)



服部川六丁目地内ガス管布設立会 B地点埴輸出土状況

報告書抄録

ふりがな	たかやすこふんぐんちようさほうこくしよ しゅつどいぶつせいりちようさ はつとりがわしぐんにしがわちくそくりようとうちようさほかー
書名	高安古墳群調査報告書ー出土遺物整理調査 服部川支群西側地区測量調査他ー
副書名	
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	62
編著者名	吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 TEL072-991-3881
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
たかやすこふんぐん	やおし						
高安古墳群等	八尾市	27212	34 37 9	135 38 41	20090401～20100331		遺物整理
しおんじやまこふん	やおしおおたけ						
心合寺山古墳	八尾市大竹	27212	34 38 17	135 38 45	20090401～20100331		遺物整理
こおりがわにしづかこふん							
郡川西塚古墳	八尾市郡川	27212	34 37 26	135 38 23	20090401～20100331		遺物整理
たかやすこふんぐんはつとりがわしぐんにしがわちく	やおしはつとりがわ						
高安古墳群服部川支西側地区(測量調査)	八尾市服部川	27212	34 37 26	135 38 41	20090601～20091225	約60,000	測量調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
高安古墳群など(遺物整理)	古墳	弥生～古墳時代	大窪・山畑18号墳・神立おんち山古墳 服部川西1号墳・水越遺跡他		須恵器・土師器・ミニチュア炊飯具甕・埴輪・玉製品石器他		
心合寺山古墳(心合寺跡)	古墳(心合寺跡)	古墳～室町時代			瓦・蔵骨器		
郡川西塚古墳(遺物整理)	古墳	古墳時代			埴輪他		
高安古墳群服部川支群西側地区(測量調査)	古墳	古墳時代	古墳48箇所(約60,000㎡)				

八尾市文化財報告62 平成21年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

高安古墳群 調査報告書

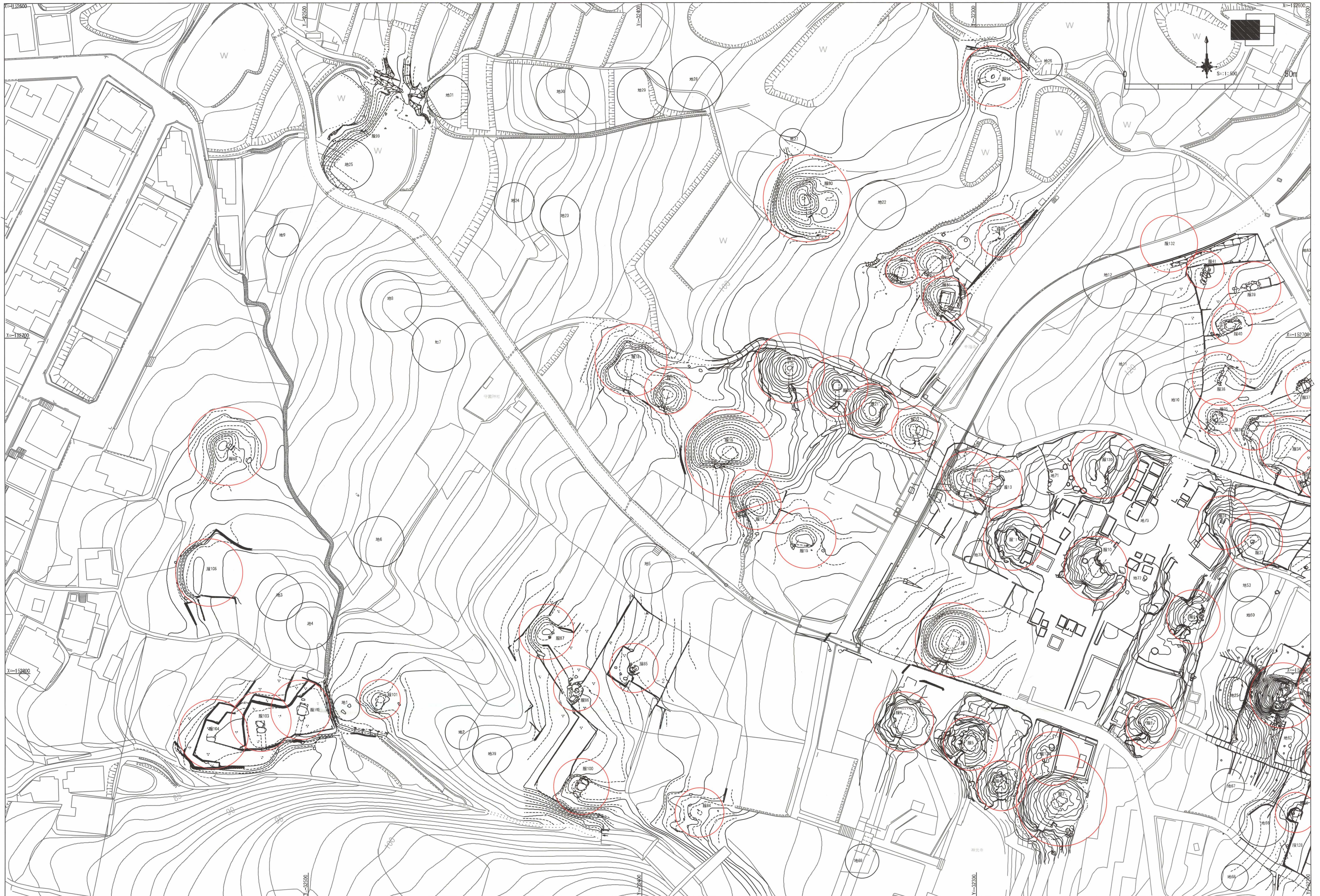
—出土遺物整理・服部川支群西側地区測量調査他—

発行年	2010年3月
発行	八尾市教育委員会 八尾市本町1丁目1番1号
編集	生涯学習部 文化財課
印刷	(株)近畿印刷センター

[八尾市刊行物番号 H21-151]



付图1 高安古墳群 服部川支群 西側地区 測量図 (北東地区 1/500)



付图2 高安古墳群 服部川支群 西側地区 測量図 (南西地区 1/500)

